

逆行ハリー、ぼくのか  
んがえたりそうのせか  
い

うどん屋のジョーカー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ハリー・ポッターが「戻って」きた。

宿命の敵、ヴォルデモート卿を打ち負かしてから二十五年、あの生き残った男の子は普通の中年男になっていた。

仕事に疲れ、育児に悩み、日々の楽しみはスポーツ中継のラジオをトイレで聞くこと。闇の帝王が滅んで以来、魔法界はすっかり平和に包まれていた。事件といえば、マグルの発展した科学に取り憑かれた若者たちが、古臭い魔法界に嫌気がさして起こすちよつとした「反抗運動」くらいだ。

一方、ハリーの私生活は雲行きが怪しくなってくる。

親友のロンとハーマイオニー夫婦が大喧嘩をし、離婚寸前の大騒動になり、それに伴いハリーとジニーの夫婦仲も拗れてしまった。

緊張感の漂う家に耐え切れず、ハリーは夜の酒場へ逃げ込んだ。

そこで偶然出会ったハーマイオニーに、彼は言ってしまった。「もし、君と結婚していたら」

すぐさま後悔したハリーは慌てて店を立ち去り、その道中、交通事故にあってしまふ。目が覚めると、ハリーは「十二歳だった頃の少年の世界」に戻っていたのだった。

★ハリハ要素あり（ハリハになるかは不明）

★救済あり

★綺麗なハリーはもういない

★思考に昔のハリーの面影はある

★中身は大人なので色々とチート

★孫世代が出てくるが呪いの子とはそんなに関連してない

★リアルタイム更新

★見切り発車

# 目次

ハリー・ポッターと時の記憶

プロローグ	1
帰ってきた日	19
ダイアゴン横丁で再び	27
リドルの日記	44
帰ってきた翌朝	56
ホグワーツまでの旅	75
組み分けの儀式	94
隠されていた怪物	113

## ハリー・ポッターと時の記憶

### プロローグ

ヴォルデモート卿が滅んだ戦いから、二十五年の月日が経った。

全く何も起きないというわけでないが、闇の帝王が存在していた頃に比べると魔法界は随分平和になっている。英雄ハリー・ポッターも、赤ん坊の頃から背負っていた重荷をおろし、平凡だが穏やかな日々を愛する家族と送る……はずだった。

時刻は夜の九時に迫っていた。

上の方で、ジニーとロンが言い争う声が聞こえる。

ハリーはリビングのソファで新聞を読んでいた。やがて下に降りてくるだろう不機嫌な妻に、どう対応しようかと考えると気が滅入った。

一か月前から、親友のロンはハリーの家の客間で暮らしていた。

というのも、ハーマイオニーと離婚一步手前の大喧嘩をしたからだ。

これまでも二人が喧嘩をして、ロンがハリーの家に逃げてくることはよくあった。

だが二、三日もすれば、ハーマイオニーがロンを迎えに来て、お互い悪かったと謝り合い、熱いキスを交わして去っていく。これまではそれで片付いた、けれど今回はやけ

に長引いている。

今回もハーマイオニーはロンが家出して五日目で迎えに来たものの、ロンが意地を張って帰ろうとしなかった。それから二回、ハーマイオニーは出直してきたがロンは一步も譲らない。とうとうハーマイオニーも愛想を尽かして「なら好きにして！」と言い捨て去ってしまった。

一月も長引いた二人の喧嘩のきつかけを、簡単に説明するところだ。

ホグワーツが夏休みに入ったので、子どもたちを迎えるためポッター夫妻とウィーズリー夫妻は九と四分の三番線に来ていた。

すると、汽車から降りてくる子ども群れの中に、ロンがあるものを見つけた。ローズ・ウィーズリーがスコルピウス・マルフォイと別れのディープリキスを交わしている姿を。

ロンは激怒してスコルピウスを殴り、それだけじゃ満足せず、糞爆弾を持ってマルフォイ邸に乗り込もうとしていた。

ローズはボーイフレンドに対する父親の態度が我慢ならないと怒って、親子の口論が始まり、ハーマイオニーがローズの肩を持ったことでロンの不満が爆発し、いつもの夫婦喧嘩も加わって事態は深刻なものになっていった。

ロンがハリーの家に逃げてきたとき、ジニーが今回はロンを家に泊めるわけにはいか

ないと怒っていたが、ハリーは困っている親友を放っておけなかった。

これで今度はハリーとジニーの仲が拗れてしまった。

日頃、ジニーは自分の意志を明確に表示するタイプだった。ただ、ハリーに関しては別だ。

憧れが恋になったジニーは、ハリーに不満を感じても、ハリーを否定する言葉を言うことはあまりない。その代り、抑え込んだ感情を目に宿して責めるように見つめてくるのだ。

ハリーが「言いたいことがあるなら言ってくれ」というと、怒ったような顔になるが「別に何も無い」と返ってくるのが常だった。

そういう訳でまともな話し合いが出来ることもなく、ハリーとジニーは互いのフラストレーションが溜まっていくばかりだった。

どうしたものか、とハリーは白髪交じりの頭を頼りなく振った。精神的な理由なのか、体質なのかは分からないが、三十歳を過ぎてからハリーの髪に白髪が増え始め、今は髪の四割近くが白くなっていた。

老け込んだ外見の所為で益々疲労感が増している。ハリーがため息を零したとき、長男がリビングに入ってきた。

こげ茶色の短髪で青い目をしているが、それら以外はハリーの父親の容姿とよく似て

いた。クイディッチで鍛えられた遅く健康的な身体をしている。

「母さんと伯父さん、まだやつてるねえ」

天井を見上げながらニヤリとジェームズが笑った。

「ジェームズ、今回はお前も悪ノリしすぎたんだ。反省しているのか？」

ハリーは読んでいた新聞を畳み、ジェームズを見上げる。

ロンが糞爆弾を土産にマルフォイ邸に乗り込もうとしたとき、ジェームズもそれに使乗しようとしていたのだ。しかも、糞爆弾を持って行くと焚きつけたのも彼だった。

「あんなの単なる冗談だよ。糞爆弾で人が死ぬわけじゃあるまいし」

「ジェームズ、もう学生は卒業したんだ。夏が終わればお前はグリーンゴッツの銀行員だぞ。もっと行動に慎みを持って」

ハリーの言葉にジェームズが眉間を寄せた。

「銀行員だなんて、そんな硬い言い方しないでよ。ゾツとする。僕がやるのはトレジャーハンター。冒険家だ。あーあ、父さんたちの時代なら、闇祓いになるか不死鳥の騎士団に入って、ヴォルデモートや死喰い人と戦ったりして楽しかっただろうに。いつそ革命派にでも」

「ジェームズー！」

ハリーの剣幕にジェームズの肩がびくりと跳ねた。



「冗談だつてば、父さん」

「冗談でもそんなことを言うんじゃない。お前は戦争がどれほど恐ろしいか分かっていないんだ。あのときは生まれてもなかったんだから」

「まあね」

ジェームズは父の叱責にちつとも堪えていないようだった。

ハリーは再びため息をつく。

足音がした。誰かが下に降りてくるらしい。

とうとうジニーが来るか、とハリーは身構えたが、リビングに入ってきたのはアルバスだった。

ホグワーツに入りたての頃は昔のハリーと瓜二つだったが、身長はハリーよりも高くなり、肩付近まで伸びた髪をサイドを残して後ろで結んでいた。何度も注意しているのに、猫背は直っていない。

キツチンに用があるらしく、その方向に向かって歩いていった。しかし通路に立っているジェームズを見て立ち止まり、じろりと睨みつける。

「邪魔」

「なんだよ、根暗スリザリン」

アルバスの陰鬱な視線に、ジェームズが挑戦的に応える。

「うっぜーな」

アルバスが顔を背けて小さく呟いた。

「はあ？　なんか言ったか？　声が小さくて聞こえないな」

「ジェームズ、やめろ」

「本当に馬鹿だなんて言ったんだよ」

「アルバス……！」

ハリーは立ち上がって二人に近寄ったが、すでに睨み合いが始まっていた。

「おい、馬鹿はそっちだろ。いつまでもウジウジしてるんだ？　もう五年もホグワーツにいるくせに、死ぬまで組み分けを引きずるつもりかよ」

「さつき根暗スリザリンって言ったじゃないか！」

「お前が根暗なのは事実だろ。陽気なスリザリン生に申し訳ないね。大体な、父さんのことなんて僕はお前より前から言われてたんだぞ」

「ジェームズはグリフィンドールだから分らないんだ」

いくらハリーがやめろと言っても、二人の言い争いはヒートアップしていく一方だった。その上、ジェームズがアルバスの言い分が気に食わなかったらしく、さらに弟に詰め寄りをはじめた。

「そんなの関係ないね。シリウス・ブラックだって似たような組み分け結果だったのに

虐められなかっただろ。そりゃあ最初はみんなお前がポッター家の子供だとか、それなのにスリザリンだとかを気にしてただろうさ。だけど今、お前が嫌われ者になつてるのはお前が根暗だからだよ」

「何も知らないくせに！」

「何を知らないつて？」

「何もかもだ！」

二人が同時に杖を出した。

「そこまでだ！ いい加減にしろ、ジェームズ、アルバス」

杖を突きつけ合う両者の間に割り込んで、ハリーはそれぞれを厳しい目で制した。

ジェームズはハリーが視界に入ると杖を下ろしたが、アルバスは未だに怒りに燃える目でジェームズを睨んでいた。

「アルバス・セブルス・ポッター、杖を下ろすんだ」

ハリーは低い声でアルバスに言った。

するとアルバスが勢いよくハリーを見た。

「こんな名前、嫌いだ」

何かを返す間もなく、アルバスは反転して乱暴な足取りで来た道に戻って行った。すると、進行方向にある階段から慌てた様子でリリーが降りてくるところだった。蜂蜜色

のショートヘアが頭の横で揺れている。目は琥珀色だったが、ハリーの母親の遺伝が強い顔立ちで今は心配そうな表情をしていた。

リリーはアルバスを見つけると、急いで駆け寄った。

「どうしたの、アル。またジェームズと何かあったの？」

「うるさいな、構って来るなよ」

アルバスは心配そうに近づくとリリーに眉間を寄せて、不機嫌な声で突き放した。

「ハッ、妹に八つ当たりかよ！ 弱虫アルバス！」

ジェームズの言葉にリリーの眉が上り上がる。

「ジェームズ！ そんな言い方やめなさいよ！」

庇うリリーを無視して、アルバスは階段を駆け上がっていった。

「あ、待つて。アル！」

リリーもその後を追いかけて、二人の足音が小さくなっていくと、リビングには再び静けさが訪れた。

ハリーは、痛んできた頭を押しさえてジェームズに向き合う。さきほどまで弟と殺し合い寸前の喧嘩をしたとは思えないほど、ケロリとした顔をしていた。

「どうしてアルバスと仲良く出来ないんだ。昔も喧嘩はしていたけど、それほど仲は悪くなかっただろう」

「あいつが仲良くしようとしななんだ。自分の世界に閉じこもってき、勝手に敵を作ってる。何か言うならアルバスに言いなよ」

ジェームズは肩を竦めて、リビングのテレビをつけた。

「あーあ、今どきテレビなんて古臭いよな。なんで魔法界の流行ってマグルよりずっと遅いんだろう。スマホを持つてるマグルだってもういないって言うのに」

ソファにふんぞり返ってチャンネルを弄りながらぼやくジェームズを置いて、ハリーはリビングを出た。ちようど、ジニーが上から降りてくるところだった。

「下で子供たちが騒いでいた？」

「ジェームズとアルバスがぶつかっただんだ」

腰に手を当ててジニーが溜息をついた。

「最近、アルバスはますますピリピリしてきたと思わない？」

「精神的に自立しようとしているんだろう。僕もあの年頃はあるな感じだった」

そう言いながら、ハリーは玄関に掛けてあったコートを羽織る。

「僕、ちよつと出かけてくるよ」

するとジニーが眉間を寄せた。どうやら、ハリーが出かけることをよく思っていないようだ。

「何か、話すことがあった？」

ハリーが動きを止めてジニーを見ると、ジニーは曖昧な笑みを浮かべた。「いいえ……行つてらっしゃい。あんまり遅くならないでね」

滑るように頬にキスをすると、ジニーはリビングに消えた。

ハリーは数秒玄関に突っ立っていたが、やがてリビングから聞こえるジニーとジェームズの声を背に家を出た。

「ハーマイオニー？」

ハリーがダイアゴン横丁の酒場に行くと、カウンター席に見覚えのある背中があった。

「あら、あなたも来てたのね」

飲みかけていたジョッキを置いて、ハーマイオニーが微笑んだ。疲れた顔をしている。

「鼻の下に泡が付いてるよ」

小さく笑つて指摘すると、ハーマイオニーは慌てて鼻の下を拭いた。こういうところは、学生の頃と変わっていない。

ハリーはハーマイオニーの隣に座つて、バーテンダーに「彼女と同じものを」と注文した。

バーテンダーが去つてしばらく二人は無言だった。

「ロンの様子はどうか？ あの人、その」

ハーマイオニーが思い切ったように切り出した。

「うーん、まだそつちに戻る気はないみたい」

その答えに、ハーマイオニーは力なく「そう」と言つてジョッキを傾けた。

ハリリーの前に、ジョッキが置かれた。蜂蜜色の液体の上に、分厚い泡がのつている。お金を払つて、ジョッキに口を付けた途端、ハリリーは笑いそうになった。

「これ、バタービール？」

液体を飲み込みながらハリリーはどうとう笑う。ハーマイオニーも笑つた。

「ええ、そう。お酒を飲みたいけど、酔っちゃいけない気がして」

「ああ、そう言えば、ウインキーつて屋敷しもべ妖精のことを覚えてる？ 元はクラウチのところの屋敷しもべ妖精だったけど、ホグワーツで働くようになってさ。バタービールでべろべろになつてた」

「ええ」

ハーマイオニーは少しばつが悪そうな笑みを浮かべた。

「ああ、あの頃の君は屋敷しもべ妖精に熱心だったよね」

「まあ！ ハリー。私は今も、彼らの境遇に関して考えることを止めてないわ。あの頃の私が浅はかだったのは、彼らの歴史背景を詳しく知ろうともせずに、目の前にあるこ

とだけで物事を判断していたことよ」

「それじゃあ君、まだ S P E W の活動をしてるの？」

「S、P、E、W、よ。反吐じゃないわ。ちなみにあなたはまだ会員ですからね」

「へっ」

目を瞬かせるハリーに対して、ハーマイオニーが有無を言わさぬ笑みを見せた。

思わずハリーは吹き出した。

ハーマイオニーもつられたように笑い出す。二人は顔を見合わせて大笑いした。目の端に涙が滲み出し、頬が痛んだ。ハリーはこんなに大笑いしたのは久々な気がした。

だが、ハーマイオニーの笑顔がだんだん小さくなっていった。笑顔が消えると、ハーマイオニーは俯く。

「私……もうダメかもしれない」

「ハーマイオニー！」

ハリーが驚いてその名を呼ぶが、ハーマイオニーは小さく頭を振って顔を上げる。その表情は少し悲しみもあったが、それよりも穏やかさの方が勝っていた。逆にその穏やかさに、ハーマイオニーがロンのことを振り切ったような清々しさも感じて不安になる。



「いいえ、もうたぶん無理なの。……私ね、あの人の子供っぽいところに惹かれたわ。そう言うところがいつも私を笑わせてくれた。それに必要とされているみたいで嬉しかったの。きっとそういうところがロンには鬱陶しかったのね。ほら、私ってかなりお節介なところあるでしょう。そして私も、時々、ロンの幼稚な所に付き合いきれなくなる。……堪えてきたけど……お互い、抑えきれないくらいに積もってしまったのね。それにね、ハリー。私はもう、昔ほど変わることが怖くないの。昔は少し何かが変わるだけで、世界が壊れるんだと思ってた」

ハーマイオニーはジョッキを両手で持つて、縁の方に額を当てた。

「ロンと別れることも視野に入れてる」

ハリーはジョッキのあまり声が出なかった。そんなハリーを見て、ハーマイオニーは慌てたように付け加える。

「もちろん、それは最終手段だけだね。あの、ごめんなさい、ハリー。あなたのところまで色々と巻き込んでしまつて」

ハリーは何とか声を出そうとして、何度か唇を動かした。

「いいんだ。二人とも大事な人だから」

やっと出た声は頼りないものだった。

「でも、私たちの所為でジニーと喧嘩したのよね……」

心配そうに顔を覗き込むハーマイオニーに、ハリーは首を横に振った。

「いや、違う。それは僕たちの話だ。君らが関わってなくても、こうなつてた。僕ら夫婦にもまた問題がある」

ハリーは一度バタービールに口を付けた。一口を飲み込むと、ジョツキを静かに置いて口を開く。

「ジニーは色々と察してくれるんだ。全てが僕のいい様にしてくれようとしている。ただ、僕も間違ふことがある。いや、しょっちゅうだな。間違っているかどうかさえ分からないときがある。僕はジニーに……本音を言つてほしい。僕が間違つていたら、それを何も言わずにフオローしてもらうより、一緒に何とかしていきたいんだ。でも、たぶん、言えなくしているのは僕のせいかもしれない」

「ああ、そんな、ハリー」

「僕はジニーを信用させてないんだ。君みたいに」

ハリーはハーマイオニーの目を見つめた。彼女の薄茶の瞳をこんなにもじつと見たのは、いつ以来だろう。もしかしたら初めてかもしれない。虹彩の細かさまで観察していると、ふと頭にとある考えが思い浮かんだ。

飲んでいたのはバタービールなのに、なぜか頭がぼんやりして、ハリーはその考えが正しいかどうかも考えずに口に出していた。

「もし君と結婚していたら」

言葉の途中でハーマイオニーの瞳が強く揺れ、そして目が逸らされた。そのことでハリーは我に返る。

慌てて誤魔化すように、ハリーはバタービールを一気に飲んだ。重たい泡と炭酸がいつぺんに流れ込んで来て咽そうになるが、それでも飲み切った。

口元の泡を手の甲で拭って、立ち上がる。

「じゃあ、そろそろ帰るよ。あまり遅くならないでって言われてるし」

ハリーの言葉に、ハーマイオニーは目を逸らしながらも頷いた。

そのことにちよつとした胸の痛みを感じつつも、ハリーは逃げるように店を後にした。

ダイアゴン横丁を早足で歩き抜け、マグルの町へ出た。

歩道歩く脇を車が何台も流れていき、上空でも車がハリーを追い越す。

それを見てハリーは、ホグワーツの二年生になったばかりの頃を思い出した。

あのときフォードは、ウィーズリーおじさんの魔法で空を飛んでいたが、あれから二十年以上経った頃、マグルは魔法なしで空を飛ぶ車を発明してしまった。

それ以外でも、マグルはどんどん魔法使いを脅かすほどの発展をとげている。魔法界では、未だにどうしてヴォルデモートが箒なしで飛べたのかも分かっていないのに。

そんなマグルのめまぐるしい進歩に感化されて、ジェームズと同じ年頃の魔法使いたちが、古臭い魔法界に革命を起こそうとグループのようなものを作っていた。去年、そのグループが、マグルの科学者たちと接触してしまったことでイギリス魔法界にちよつとした混乱が起きた。

怪我人が出たわけではないが、マグルの世界も巻き込んだことでここ二十年近くの中では一番大きな騒動となり、通常は闇の魔法使いだけを専門とした闇祓いたちも騒動の鎮圧に駆り出された。

息子と同じ年頃の彼らを捕まえるのは心が痛んだが、原則、魔法使いの家族や大統領及び首相以外のマグルに魔法界の存在を知らせることは違法だ。

運良くハリーの子どもたちはこの騒動に関わっていないが、全く影響を受けないかったわけじゃない。

若者を中心とした出来事に、ホグワーツの生徒たちが影響を受けないわけがないのだ。

今回の革命派は、言い換えれば親マグル派だ。そして魔法界の古臭さを嫌っている。元々保守的で、さらに「反マグル派」の印象が強いスリザリンは、ある意味この騒動の一番の被害者と言っても良かった。

革命派に影響を受けた過激な子が、スコープピウスやアルバスに向かって「蛆のたかつ

た脳みそ」と言ったのだとリリーが激怒していた。それを聞いた時、ハリーはかなりショックを受けた。「蛆のたかった脳みそ」という言葉は、ここ最近に生まれた保守派を指す差別用語だ。

ヴォルデモートの時代と立場が逆転してきていることに、ハリーたち世代が危機感を覚えないわけがない。

さらに「革命派」はイギリス魔法界以外にも存在した。最早、魔法界の社会問題だった。

このことで、魔法省で働いているハリーとハーマイオニーは真夜中も休日も問わず呼び出されることが多くなっていた。

家族と居る時間より、ハーマイオニーと顔を合わせる時間の方が長かったかもしれない。

休みなく働いて疲れ切ったときには、二人でコーヒーを飲んで励まし合ったこともあった。

「ああ」

ロンとハーマイオニーの喧嘩、そしてジニーとハリーの仲の拗れに、この騒動は全く関係なかったとは言い切れないかもしれない。ハリーは思った。

現実逃避して別のことを考えていたはずなのに、結局先ほどの酒場での光景が頭の中

に蘇る。

思わず唇を噛んだ。

ダンブルドア先生。先生は僕のことを素晴らしい心の持ち主だつて褒めてたけど、それは子供だったからだ。今の僕は、褒められるほどの心を持っていない。それどころか、今の僕を見たら先生はきつと軽蔑するかもしれない。

走つていく車の隙間から見える夜空に星は見えない。ハリーは空から視線を下ろした。頼りない足取りで歩みながらふと思う。未来を予言する星は、今後のハリーをどう表しているのだろうか。

「危ないー」

誰かの叫び声があった。上から光が降ってくる。

驚いて上を見たら、車のヘッドライトがすぐそこにあつた。息を吸う間もなく、とてつもない衝撃が体を襲う。

体に重みが押し掛かつて、上手く息ができない。意識が遠のく。薄れていく世界で、闇に溶けた眩しいライトは、緑色に光つて見えた。

## 帰ってきた日

体が痛い……。何か重いものが上に乗っかっているみたいだ。

ハリーは目を開けた。ぼんやりとした視界に、薄暗い周りの風景が輪郭をもたずに映っている。どこからかキジバトが鳴く声が聞こえた。明け方近くなのだろうか。

とりあえず、自分が死んでいないことにほっとした。命さえあれば、あとは魔法でなんとか助かるはずだ。

そう思ったとき、ハリーは違和感をおぼえた。横になっている床が、冷たくない。倒れこんだアスファルトのように硬くもない。

布の柔らかな感触がする。もしかしたら、今は病院にいて、ベッドに横になっているのかもしれない。

そう考えて、ハリーは枕元を探った。幸運にも、腹部が熱を持って重いこと以外は、体に痛みを感じない。

治療が既に行われたのだろう。聖マングに運び込まれているのなら、治りが早い事にも納得できるし、マグルの病院ならよほど長い間眠ってしまったのかもかもしれない。そうだったら、みんなに相当心配をかけてしまった。

しかし笑い話になるはずだ。魔法使いが自動車事故で死にかけるなんて！

枕元に眼鏡が置いてあった。ハリーはそれを取って掛ける。

そして驚いた。

部屋だ。青っぽい朝の光が差した小さな木造の部屋にハリーはいる。天井が斜めになっている。まるでグリフィンドールの寮にいるみたいなのに、部屋の中が赤色で埋め尽くされていた。壁には所狭しと、クイディッチ選手たちが映るポスターが貼ってあった。箒を片手に、手を振っている。彼らの来ているユニフォームの色は、目を凝らすと鮮やかなオレンジ色だと分かる。きつと、もつと日が出た頃にこの部屋を見れば、夕日に包まれているような錯覚を起こすだろう。

病院じゃない。それどころか、ここには見覚えがあるぞ。ハリーの心臓が速く脈打った。

体を起こそうとして、お腹の上あたりにベッドからずり落ちた子どもの上半身が乗っているのに気付く。赤い髪をしている。重いのはこのせいか。と納得しかけたハリーは目を見開いた。

この子は誰だ？

ハリーが身じろぎすると、その子の頭がゴロンと横を向いた。

ヒューゴ？



娘のリリーと同一年の、ウィーズリー家の長男の名を思い浮かべる。

だけど、彼じゃないとすぐに分かった。ハリーの心臓は今にも爆発しそうなくらい暴れていた。嫌な汗が背中を伝う。

まさか、ロン？

ありえない可能性をあげてみたが、しかし考えてみると、この部屋をよく知っている。昔、泊まっていたロンの部屋にそっくりだ。

嘘だ、と目を擦ろうとして持ち上げた手にハリーは度肝を抜く。

小さい。そして手の甲がつるつるしている。どう見ても子供の手だ。

これは夢だろうか。ハリーは身体の上に乗っていたロンそっくりの子をそつとどける。

立ち上がると、部屋にあった家具がやけに大きく見えた。

ドアノブの位置が高い。

「こんなことって」

呟きかけた声にハツとする。高い。声変わりもしていない。

そこでハリーはやつと自分の体が子供になっていることを認めた。

胃の中に氷が流れ込んだような気分で立ち尽くしていると、ホツホと、小さな鳴き声が聞こえた。

後ろを振り返ると、窓枠の近くに白くて美しいふくろうが留まっていた。丸い目でハリーを見て、首を傾げる。

「ヘドウィグ！」

ハリーは小さな声で歓声を上げた。足音を発てないようにそつと近づくと、ヘドウィグは差し出されたハリーの人差し指を優しく噛んだ。

噛まれた部分の熱がとても愛おしく感じる。ヘドウィグの頭をゆつくり梳くと、心地よさそうに目を細めた。

「また君にこうして触れるなんて。何て言えばいいんだろう……」

ハリーの視界が滲みかけたが、「ぐがっ」という大きな軋がそれを邪魔した。ヘドウィグが驚いて羽根をふくらませている。

軋の出所であるロンのような、いやロンが、酷い寝相で寝ていた。

その枕元には、太った灰色のネズミがスースーと寝息を発てて眠っている。指が一本かけていた。ワームテールだ。ハリーの頭を記憶が一瞬にして駆け巡った。叫びの屋敷で起きたこと、セドリックと行った墓場での出来事、最後に、銀の手でゆつくり絞殺されていく男の顔。濁流のように流れていくそれらを受けて、ハリーは複雑な面持ちでベッドに近寄った。

ロンの枕元で寝ているネズミを持ち上げて、なるべくロンから離れたところに置く。

安心しきっているのか、ワームテールは持ち上げられてもぐっすり寝ていた。

ヘドウィグに少しの間の別れを告げて、ロンの部屋を出たハリーはそつと下に降りた。ウィーズリー家の入り組んだ階段を降りる間、ハリーはこれが夢かどうか考えていた。

夢にしては、感覚がやけにリアルだ。

視界はクリアだし、空気の匂いや温度も感じる。さきほど、ロンの熱や重みを感じたことを思えば、ここは現実の世界なのかもしれないと結論付ける。

タイムスリップしたのだ。スキヤパーズがいることと、ロンの家にいることを合わせると、二年生に上がったばかりの夏休みの頃だろう。

車にぶつかる間際、何かの魔法や魔法道具を使ったわけではない。体がもとに戻っているから、ハリーが知っている方法のタイムトラベルではないだろう。

ホグワーツに通ったばかりの頃は当たり前前に持っていた「この世界では何が起こるか分からない」という感覚を忘れていた。

すつかり、魔法に慣れ切っていたのだ。いや、慣れたつもりだったようだ。

一階に差し掛かると、ダイニングの方から食欲をわかせるような匂いが鼻を擽る。

キッチンにはモリー・ウィーズリーがいた。

「あら、ハリー。早起きしたのね」

物音に気付いて振り返ったモリーがにっこり微笑む。

「おはようございます……」

最近見たモリー・ウィーズリーより三十歳は若い。

「待ってて。朝ご飯はもうすぐ出来るから」

やがて、モリーは大皿に大量のベーコン・サンドイッチを並べると、ハリーに「先に食べてていいわよ」と言い残して上へ行った。

みんなを起こしに行くようだ。

しばらくすると、上が賑やかになってきた。

ハリーが2個目のサンドイッチにかぶりついているとき、ダイニングに赤毛の男の子が眠そうな顔で現れた。着ているパジャマに、大きく「F」の字が刺繍されている。

「フレッド！」

ハリーは思わずサンドイッチを放り投げて、フレッドに抱きついた。

「おっと」

「会いたかった！ 会いたかったよ！」

目の端に浮かぶ涙を抑えることもせず、フレッドの体に頭を押し付ける。

今のハリーよりは大きい体格だが、娘のリリーより今の彼は年下なのだ。こんなに幼かったのか、とフレッドの戸惑う顔を見ながらハリーの視界はますます滲んだ。

「ハリー、いつから俺の熱烈なファンになったんだ？　もしかして、何日か前に胸毛が生えてきたことをロンから聞いたのか？」

戸惑いつつもちゃんとジョークを言う彼にハリーは笑みをこぼした。すると、フレッドの後ろに全く同じ顔が立っているのを見つける。

「ジョージ！　耳がある！」

「ああ、目と鼻と口もあるぞ」

ジョージはそう言った後、フレッドと顔を見合わせて肩を竦めた。ハリーはようやく我に返りながらも、嬉しい気持ちを抑えきれなかった。

続々とウイーズリー家の人たちがダイニングに集まり、賑やかな食事が始まった。

奥の席に座った幼いジニーが、ハリーと目が合った途端に赤くなってそわそわしだした。

その彼女が将来ハリーの妻になっているのは、どこか奇妙な感覚だった。今の初々しい姿と、ほんの一時前に会った大人のジニーの表情を比べると、ハリーの胸にちくりと痛みが走る。これはたぶん、罪悪感だ。何に対してのものなのかは、考えることを止めた。

また逃げているな、と心の中で大人の姿のハリーが苦い顔をした。

「ハリー！」

随分昔に聞いた声がハリーを呼んだ。ロンが欠伸をしながらダイニングに入ってきて、ハリーの隣に座る。これで家中の人が全員そろった。

「どうして早起きなんかしたの？ いなくなっただと思つてビックリしたよ」

「まあ、呆れた。私が逆にどうしてお寝坊するのか聞きたいくらいですよ。何日も前から今日は朝早くに出かけると言つておいたでしょう」

モリーおばさんに咎められて、ロンはぼつが悪い顔をする。三十年以上たつてもこの光景は変わらないことを、今のロンに言つたらどんな顔をするのだろうか。ハリーは一人でこつそり笑つた。

「さあ、みんな急いで朝食を食べて。買わなきゃいけないものがたくさんあるんだから」  
モリーおばさんの言葉に、今日はダイアゴン横丁へ行く日だったのかとハリーは思い出した。

## ダイアゴン横丁で再び

初めてのはずの煙突飛行を成功させてダイアゴン横丁に着くと、ウィーズリー家の人々は感心したようにハリーを褒めた。

正直に言えば、ハリーは煙突飛行での移動があまり好きじゃない。煤まみれになるし、案外手間がかかる。それならもう、酔うことがなくなつた姿くらましの方が何倍も気楽だった。煙突を使わなくてもいいのなら出来るだけ使いたくない。

けれど今のハリーは十二歳だった。「姿くらまし」と「姿現し」は成人しないと試験を受けられないのだから、十七歳にもなつてない子がやるのは悪目立ちしてしまう。移動手段以外の魔法も、大人の魔法使いがない場所では全く使えない。大人がいても、まだ子供のハリーが知らないはずの魔法を使う訳にもいかない。これが思つたよりも不便だった。昔はこの生活を普通に行っていたはずなのに、すっかり何でも魔法で解決しようとしてしまう癖がついたようだ。

二年生なら「呼び寄せ呪文」も習つてないはずだ、と分かつてどんなにガツカリしたことだろう。

ウィーズリーおばさんが、煤で汚れたハリーの顔を魔法で綺麗にしてあげようとして

いたときだった。ロンが「あつ」と声を上げる。

「ハリー、誰が見えたと思う？」ロンが嬉しそうに言った。「ハグリッドだ」

ハリーもロンと同じところを見ようとしたが、おぼさんが「スコージファイ」と唱えたため顔中が泡に包まれた。

「あ、ハーマイオニーも一緒だ」

ハリーが咽た。ウィーズリーおぼさんは呪文の所為だと思つたらしく、魔法を止めた後に心配して謝ってくる。丁寧に「おぼさんの所為じゃないと伝えた後、ハリーは顔に残った泡を手の甲で拭いながら、小さく跳ね続けている心臓を落ち着かせようとした。

「なあ、ハーマイオニーのやつ、宿題のことで色々言ってくると思う？」だつてあいつ、送ってくる手紙で毎回宿題の話題をだしてきたんだぜ」

ロンがおぼさんに聞こえないようハリーにそつと耳打ちする。

この頃、ハーマイオニーはともかくロンは彼女をまだ何とも思っていないかったのだ。それに気が付いて、ハリーの心臓の鼓動はさらに加速した。

「よお、ハグリッド、ハーマイオニー！」

ロンが手を大きく振っている方向を、ハリーは中々見ることが出来なかった。つい俯きがちになっていたが、意を決して顔を上げる。

最初に目に映ったのはハグリッドだった。三十年後もハグリッドは現役で森番を務



めているが、こうして見るとやっぱり少し老けていたんだなとハリーは思った。

ハグリッドはごわごわした髭と髪の毛の隙間から真つ黒の瞳を覗かせ、ハリーとロンにっこり笑いかけた。

「久しぶりだなあ、二人とも。元気だったか、ええ？ さつきそこでハーマイオニーに会ってな」

ハリーは視線を下ろした。予想より随分下まで降ろして、ようやくふさふさした栗色の髪が見えた。

「小さい」

思わず呟いたハリーにロンが首を傾げる。

「どうかした？ ハリー」

「ううん」

なんでもない、と言おうとしたとき、ハーマイオニーがハリーに抱きついた。

「心配したわ！ 何回も手紙を送ったのに返事を超越さなかつたから。でも誰かに邪魔されていたんでしょ？」

離れたハーマイオニーの口元から、少し大きい前歯が見えた。それが余計に顔を幼く見せている。

ハリーは自分を嘲笑った。どうしてハーマイオニーが、数時間前に酒場で会ったとき

の姿で現れると思っていたのだろう。目の前で頬を上気させて微笑んでいる女の子に、ハリーも何とか笑顔を向けた。心臓はすっかり元のリズムに戻っていた。

そこでハリーは、自分がハーマイオニーに対してある期待をしていたことに気づいた。途端に、ハリーの頬が恥ずかしさで赤らむ。自分の考えていたことが、どんなに残酷なことかと分かったからだ。向こうの方で、ウイーズリーおじさん達と話しているジニーが見える。

ジニーの姿に心臓が疼いて、ハリーは目を逸らした。するとそこにはハーマイオニーがいる。どこを見たらいいか分からなくて、目が回りそうだった。

「それじゃあ、みんな。一時間後にフローリッシュ・アンド・ブロッツ書店で落ち合いましょう」

ウイーズリーおじさんが言った。

「行こうぜ、ハリー」

「行きましょ」

右肩をロンが叩き、左腕にハーマイオニーが抱きついた。このときハリーは改めて、自分が十二歳のハリーとしてやっていかなければならないと気付かされたのだ。

一時間ほどダイアゴン横丁をぶらぶらした後、三人は約束の書店へ向かった。夏休みだから、多くの買い物客が来ているだろうと予測していたが、それ以上に多くの人が集

まっていた。女性の割合が多い客たちは、押し合いながら入り口に入ろうとしていて割り込む隙がない。

「いったい、何が起こってるんだ」

ロンが呆れたように口をぽかんと開けた。

やっと店に入つて、ハリーは思い出した。真ん中が吹き抜けになつている二階の柵に、大きな横断幕があつた。

「ギルデロイ・ロックハートか」

ハリーの眩きは黄色い声にかき消された。

「本物の彼に会えるんだわ！」

ハーマイオニーはロックハートがいると思われる場所に向かつて背伸びしていた。

「ウヘー、マジかよ」

ハーマイオニーの様子を見たロンがハリーに向かつて苦い顔をする。

「ママだけじゃなくて、ハーマイオニーもあいつにお熱なんだ」

「だって、彼つて、リストにある教科書をほとんど書いてるじゃない！　すごい人よ！」

ハーマイオニーのような熱烈な女性ファンたちが店にすし詰めになり、買い物どころではなかった。本屋の店主は店の外に押し出されたようで、当惑した顔で客に向かつて何かを叫んでいがよく聞こえない。

ハリーたちは急いでロックハートの本を一冊ずつ掴み取り、レジに並んだ。

ロックハートを取り巻いているのはファンだけではなかった。どこかのカメラマンが、ちよこまかと動きながらロックハートの写真を撮っている。

カメラのフラッシュが焚かれるたびに紫の煙が出て、ハリーの目はしよぼしよぼと涙ぐみ、鼻水が出そうだった。

「なんでわざわざ、こんな日に、来るんだって思ったけど、でも、ママはわざと今日にしたんだ。知ってたんだよ、ハーマイオニーも——ハックション！」

ロンが耐え切れずに大きなくしゃみをした。あまりの大きさにハリーは耳を抑え、ハーマイオニーは苦い顔をする。そしてギルデロイ・ロックハートもこちらに気づいた。

「おやおやおやおや」

ハリーが顔を上げると、ちょうどロックハートと目が合った。キラキラ光る目でハリーを見つめ、勢いよく立ち上がると店中に響く声で言った。

「もしや、ハリー・ポッターでは？」

興奮した囁き声が広がっていく。ロックハートがハリーに近づくと、周囲に居た人垣がパツと割れて道を開けた。ロックハートはわざわざマントを翻してからハリーの方へ歩いて来た。

ハーマイオニーはうつとりした顔でその動きに見惚れ、ロンは止まらない鼻水と格闘していた。ハリーはまたアレをやらなきやいけないのかな、とげんなりした。

ロックハートは強い力でハリーの肩を抱き、その手を握った。カメラマンが喜んで、シャッターを何度も切る。

「ハリー、にっこり笑って！ 私と写れば一面の大見出しに載れますよ」

ハリーに話しかけながらも、カメラから視線を外さないロックハートを見てハリーは驚いた。リーマス・ルーピンの息子であり、ハリーが後見人をしているテディは今のロックハートとほぼ同じ歳だ。

無邪気な笑みを浮かべている分、ロックハートの方が幼く見えた。

あの頃はうんと大人に見えたはずなのに、息子同然に思っているテディとそう変わらないと知るとなんだか奇妙であり、同時に、ロックハートにすっかり捕まえられて晒し者になっている今のこの状況を許せそうな気がした。

確か、最後にロックハートと会ったのは、テディと結婚したビクトワールが赤ちゃんを産んだときだった。去年の秋頃だ。

ビクトワールは難産で、さらに夫の父親が狼男であり、妻の父親も狼男に襲われたことがあるということから、家庭療師の判断により病院で産むことになったのだ。

赤ちゃんが出てくるのを待ちながら、ハリーたち関係者は六階の喫茶室と病室付近を

行ったり来たりしていた。そのとき、ハリーはたまたまヤヌス・シツキー病棟の前を通った。

ここは解除不能の呪いや不適正使用呪文により、長期入院する人のための病棟だった。ペラトリック・レストレンジとその夫、そしてクラウチの息子に磔の呪いを受けたネビルの両親もここに入院していた。ネビルによると、二人はだいぶ回復したらしい。今はネビルの名前と思わしき唸り声を発すようになったのだという。

ロックハートは、病棟を出入りするための両面ドアにある小窓に、顔を貼り付けて通行人を見ていた。相変わらず、白い歯を見せて無邪気な笑みを浮かべていた。

ただ、目の下や口の端に皺ができ、波打っていた金髪はハリを失っていて、年月が経つたことを表していた。その中でブルーの目だけが純粹だったことが異様だった。

思わず動きを止めてロックハートを見つめてしまったハリーに、ロックハートがニコしながら近づいてきた。

「私のファンですか？」

ハリーが返事をしない内に、病棟に繋がる扉が開いて、ライム色のローブを着た癒者が出てきた。どうやら、ロックハートを連れ戻しに来たらしい。ロックハートを見つけて近寄ろうとしたときに、ハリーに気づいた。

ロックハートを呼び戻しに来た癒者は、前に会った人と違っていた。前は中年の女の

人で、ロックハートをおませな二歳児のように優しく扱っていた。

今度の癒者は若い男で、ロックハートを連れ戻すのはいかにも仕事だという顔をしていた。

「あなたは彼の知り合いなんですか？」

ハリーを見つけた癒者は全く表情を変えずに尋ねた。

「ええ、まあ……昔、一年間だけ彼の生徒だったことがあって」

「ああ、この人はホグワーツの教師をやったことがあったんでしたね」

特に興味もなさそうな声音で、癒者は淡々としている。

「私が先生ですか？ それは役立たずな先生だったんでしょね」

癒者はロックハートの言葉を無視した。

「この人には全く客が来ないんです。あなたが……いえ、あなたの前に一度だけ訪ねてきているようですね。だいたい前のことですけど」

ロックハートのことが記録されているのか、ライム色の手帳のようなものを見ながら癒者が言った。

「ああ、それも僕とその友達だと思います。あの、前についていた癒者の方とは違いますよね？ それから、まだ彼はよくなっていないんですか？ あのときは字も書けるようになっていて良い具合だと聞いたのですが」

「以前の方はもう歳なので退職されました。書けるようになったと言うのは、ミミズのとくった様な字のことですか？ 今のところ、記憶の回復の兆しは見えないですね。たぶんもう無理でしょう。この年齢ですし」

冷やかな癒者の視線の先で、ロックハートは廊下に並べられていた椅子に腰かけて足をプラプラ振っていた。

「ファンからの手紙ももう全く届いてないんですか？」

「ええ、さすがにもうないですね。ああ、ですが、グラディス・ガージョンという方だけが未だに送ってきますね。週に一回くらい」

「その人はいつも送ってくれるんですよ！ 私はその人の手紙が好きです！」

「部屋に行かれますか？」

癒者はハリーの顔を見て質問した。ハリーは数秒悩んで断った。ビクトワールのことも心配だったのだ。ハリーが断るとすぐにロックハートは腕を掴まれて病棟に戻されていった。

去り際に振り返ったロックハートは、ハリーに向かって「またね」とやけに甘ったれた声で言った。途端にハリーは小窓に貼りついていたロックハートを無視しておけばよかったと後悔したのだ。

「それじゃあ、ハリー。また学校で会おう」



ホグワーツで働くことを大々的に宣言した後、ロックハートは全著書をハリーに渡して去り際にウインクした。重みでよろけながらも、ハリーは人垣をなんとか抜け出した。人があまりいない隅っこの方に、ジニーが立っている。傍に買ってもらったばかりの大鍋が置いてあった。

ロックハートから無料でもらった本の山を、ハリーはジニーの大鍋の中に入れた。

「あげるよ。僕のは自分で買うから」

「さぞや、いい気持ちだっただろう、ポッター」

上から粘着質な声が振ってきた。二階に繋がる階段から、ドラコ・マルフォイがゆっくりと降りてくる。

「こんにちは、スコ——マルフォイ」

ハリーがにこやかに挨拶したのを、ドラコ・マルフォイは訝しく思ったらしい。眉間を寄せてハリーを睨んだ。

「有名なハリー・ポッターは、書店へ行くだけで一面記事か？」

「ほっといてよ。あの人が勝手に言ったことよ！」

ハリーは幼いジニーの声を久々に聞いた気がした。

「おや、ポッター。ガールフレンドが出来たじゃないか！ 一面はこれで決まりだな」  
馬鹿にした笑みを浮かべるドラコに、ジニーの顔が赤らんだ。

その後の展開は、まるで記憶をなぞるように同じだった。ロンとハーマイオニーが来てドラコと言ひ争い、そこにウィーズリーおじさんがやって来て、さらにルシウス・マルフォイが登場する。

「お役所はお忙しいようですね。あれだけ何回も抜き打ち調査をしているのだから、当然、残業代は払ってもらっているのでしょうか」

そう言いながらルシウス・マルフォイはジニーの大鍋に手を突っ込み、豪華なロックハートの本の中から、使い古しの擦り切れた本を一冊引っ張り出した。「変身術入門」だ。

「どうもそうではないようだ」

ルシウス・マルフォイのせせら笑いに、ウィーズリーおじさんが唇を噛んだ。

ハリーはふと思ひ出す。このあと、確かルシウス・マルフォイは……。黒ずくめの格好をしたルシウスを見つめた。正確には、その服の下に隠されているあるものを。

ハリーがいろいろと考えを巡らせている間に、ルシウス・マルフォイとウィーズリーおじさんの言い争いはヒートアップしていった。

「ウィーズリー、こんな連中と付き合っているようでは……君の家族はもう落ちるところまで落ちたとおもっていたんですがねえ」

ルシウスがそう言った途端、ジニーの大鍋が宙を飛び、ドサツと金属の落ちる音がし

た。とうとうウィーズリー伯父さんがルシウス・マルフォイに飛び掛かったのだ。飛びついた勢いでルシウスの背中を本棚に叩き付けると、分厚い呪文の本が数十冊もみんなの頭にドサドサと落ちてきた。

「やっつける、パパ！」

フレッドとジョージが叫んだ。おばさんが必死でおじさんを止めようとしている。だが二人の揉み合いは止まらない。

それは、ハリーがつい最近に見た光景とそっくりだった。

ローズがスコルピウスと付き合っていると分かり、ロンがマルフォイ邸へと乗り込もうとした時だ。実際、ロンはウィルトシャーにあるマルフォイの館の門の所まで来ていた。生垣を歩く白い孔雀を忌々しげに睨みつけ、魔法のかかった門を無理やり突破しようとしたのだ。

ポッター夫妻とハーマイオニー、そしてローズとアルバスがロンを止めるために慌ててその後を追いかけていた。

ジェームズが悪戯グッズを門に仕込んでこじ開けようとしたとき、館からドラコ・マルフォイが何事かと出てきた。その後ろにはスコルピウスがいた。怒り狂ったロンの顔を見て、何が起きているのか悟ったようだった。

「この間は申し訳ありません！」

スコープピウスは駆け足で門の外に出ると、ロンに向かって深く頭を下げた。ドラコはそんな息子を見て当惑していた。

「ちゃんと話し合いましたよ、お義父さん！」

ハリーは思っていた。スコープピウスはとてもいい子だ。賢く、ハリーのスリザリンに對してのイメージをがらりと変えるほど優しく、本当にアルバスは素晴らしい友を得た。しかし彼は、アルバスも常々漏らしているように、どこか少し抜けていた。

「お前にお義父さんと呼ばれる筋合いなどなヴエヴエヴえー！」

ロンの怒鳴り声はもはや何を言っているのか分からなかったが、何を言いたいのかはスコープピウスを除いた全員が理解した。

唯一彼だけは、自分の何がロンをさらに怒らせたのか考え込んでしまった。その真剣に考え込む姿が余計にロンを怒らせた。いやもうスコープピウスが何をしてもロンは怒っていただろう。

門によじ登りかけていたロンは、スコープピウスに飛び掛かった。

するとドラコがその身を愛息子の前に出し庇った。

もつれ合ったロンとドラコはそのままゴロゴゴと地面を転がりながら殴る蹴るをしていた。

「いい加減、目を覚ませウィーズリー！ 何があったにせよ、お前はもつと冷静になるべ

きだー！」

ドラコがロンの横面を殴った。

「よくも、そんなことを！ お前のところの息子を、うちの娘にけしかけたくせに！ 許すものかあああ！」

ロンはドラコに対して、最近テレビで覚えたばかりのプロレス技、アナコンダを決めた。

技を決められて赤くなっていくドラコの顔色に、激しいもつれ合いに割り込めずにしたハリーは我に返った。慌ててロンを引きはがしにかかる。

「やめるんだ、ロン、落ち着け」

ハリーがロンを引っ張ったことで、ドラコへの拘束が少し緩んだ。すると、ドラコが腹筋を使って足を振り上げ、ロンの頭を蹴り上げた。ロンの後頭部がハリーの顔面に直撃し、二人とも吹っ飛んだ。眼鏡がひしゃげ、レンズに大きなヒビが入った。ハリーは鼻から血が流れているのを感じた。

「はあ、けしかけただと——はあ、それはこっちの台詞だ、ウィーズスリイイー！」

まだハリーの上に乗っかっていたロンに、ドラコは突進してきてロンの腹に上から肘を突っ込んだ。

その衝撃はハリーの腹部にも伝わって、ハリーは朝食食べたワツフルが逆流してくるの

を感じた。

騒動は、ローズが大きな声で「やめて！」と泣き叫んだことで終わりを告げた。娘の泣く声にロンが、若い女の子が泣く声にドラコが、ようやく動きを止めたのだ。

泣き崩れそうになるローズを、スコーピウスが抱きとめた。そんな二人を見て、父親たちは気まずそうに顔を反らした。

血と泥と若干の吐瀉物をまとったハリーは、レンズのヒビの隙間からなんとか視界を確保しながら、ロンとドラコの肩に手を置いて、「とりあえず、話し合ってみよう」と提案したのであった。

「やめんか、おっさんどもー」

ルシウス・マルフォイとウィーズリーおじさんの喧嘩は、ハグリッドによって収められた。ハグリッドによって引き離されてた二人は、それでも睨み合っていた。

目を何かでぶたれたように腫らしたルシウス・マルフォイは、ギラギラした目でウィーズリーおじさんを睨みながらジニーに古本を突き出した。

さきほどジニーの鍋から取っていた、「変身術入門」の古本だ。

その本の間に、何かが挟まれているのをハリーはしっかりと見えた。

「ほら、小娘——お前の本だ。大事にしたまえ。お父上にとつては精一杯の代物だろうからな」

そう吐き捨てる、ハグリッドの手を振りほどき、ドラコに目で合図して、ルシウス・マルフォイは敏速に店から出て行った。

まだ肩を怒らせているおじさんをハグリッドが窘めている。ハリーはジニーの鍋にそつと近づいて、「変身術入門」の古本を取り出した。間に挟まっている物を素早く抜き取り、それをスポンのポケットに突っ込み、マントで隠した。「変身術入門」の本を鍋に滑り込ませたとき、ジニーがハリーに気づいて首を傾げる。

「どうしたの?」

ハリーは完璧な微笑みを浮かべて、何でもないよと言った。ジニーの顔が赤くなつた。

## リドルの日記

その後、ハリリーたち一行は漏れ鍋へ向かった。ハリリーとウィーズリー一家はそのこの暖炉から煙突飛行で帰り、グレンジャー一家はロンドンに出てバスで帰るらしい。

お互いに別れるのが惜しくて、みんなは帰る方向へ足を向けずにその場にとどまって喋り始めた。

ハーマイオニーは、ジニーに寮生活をする上で持つて行った方がいいものを丁寧に教えていた。ウィーズリーおじさんとおばさんは、ロックハートの大量の重たい本に魔法をかけて運びやすくしてあげるとハーマイオニーのお父さんに提案していたし、ウィーズリー兄弟は母親の指示で、大量の荷物を煙突飛行で運ぶための整理をさせられている。そうして一人になっていたハリリーのところへ、ハーマイオニーの母親が近づいてきた。

「こんにちは、ハリリー。今日は挨拶が遅くなってしまったわね」

グレンジャー夫人は、見た目も声も大人になったハーマイオニーに瓜二つだった。外見の違いと言えば、髪の毛が黒いストレートなことくらいだ。

ハリリーが思わずその顔を見つめると、グレンジャー夫人は微笑んだ。笑い方まで大人



のハーマイオニーにそっくりだ。ハリリーの胸の鼓動が早くなつていく。

「ハリリー、いつもハーマイオニーと仲良くしてくれてありがとう。うちの子は、前の——マグルの学校ではあまり周りに馴染めなかったの。もともと気の強い子だから、ホグワーツでも上手くやつていけるか心配だったけれど、あなたとロンのおかげでとても楽しそうだわ」

「それは……よかったです」

ハリリーが俯きがちに小さな声で応えようと、グレンジャー夫人はくすりと笑つて、ハリリーの頭のとっぺんに触れるようなキスを落とした。ハリリーの身体が一瞬にして熱くなる。

勢いよく顔を上げると、ハーマイオニーの父親がやつてきたところだった。

「そろそろ行くか。ウィーズリーさんが荷物を軽くしてくれたんだ」

グレンジャー氏がハリリーに気が付いて、爽やかな笑みを浮かべる。

「やあ、ハリリー。あまり話せなかつたけれど、我々はそろそろ発つよ」

そう言つて夫人の腰を抱いて、向こうにいるハーマイオニーを呼びだした。ハリリーは自分がグレンジャー氏に苛立ち始めているのを感じて、小さく頭を振る。

「それじゃあまた、ホグワーツ特急で会いましょうね！」

ハーマイオニーは大きく手を振つて、両親と共に店を出て行つた。たぶん汽車では会

えないよ、とグレンジャー一家を見送りながら、心の中でハリーは答えた。

隠れ穴に帰ると、荷物をロンの部屋に押し込んでから、ハリーはリドルの日記帳とインク瓶と羽ペンを持ってトイレに駆け込んだ。

インク瓶を床の蹴飛ばさない位置に置き、蓋をあけて羽ペンの先を浸す。

一度深呼吸をしてから、日記帳を開いた。

そのとき、空から巨人が落ちてきたと思わせるほどの爆音が起きた。木造の家が震え、トイレの天井から細かい木屑が粉雪のように降ってくる。ハリーは手を止めた。

もしかしたら、フレッドとジョージがダイアゴン横丁でこっそり仕入れていた花火を爆発させたのかもしれない。

家中を走り回る音がした後、おばさんの悲鳴が聞こえた。

「屋根を吹き飛ばすなんて！ 何を考えているの！」

「違うよ、ママ！ 暴発したんだよ、わざとじゃないよ！」

聞こえたのはやっぱりウィーズリーの双子の片割れの声だった。

「それが言い訳になると思っているんですか、フレッド！ 暴発するようなものを、どうして持っているの！ あなたたち、さつきダイアゴン横丁で何を買ったか見せてもらいなさい！」

「ママ、痛いよ、耳が取れちゃうよ」

「お母さんは心臓が落っこちるところでしたよ！ ジョージー」

ハリーは苦笑した。

昔はこの光景を純粋に楽しんで笑っていたが、今はお婆さんの苦勞も理解できた。

ハリーの息子、ジェームズとアルバスも昔から喧嘩をしては家中を破壊していた。

ジェームズは悪戯好きで、いつだって何か騒ぎを起こそうとしていた。アルバスは真面目な性格だったが、そのせいでよく二人の間には揉め事が起きた。フレッドたちがパーシーをからかうみたいに、ジェームズはアルバスをからかって遊ぶが、アルバスは真面目な上に負けん気が強い。

そのせいで、冗談のつもりで仕掛けられても本気で怒って対応してしまうのだ。悪い事に、それがジェームズをますます面白い気分にならせていた。ハリーが何度もそのことをアルバスに話して、だからお兄ちゃんの挑発にのっちゃダメだと伝えても、今のところあまり意味をなしていない。

一番ひどかったのは、ハリーが仕事から帰ると、家があったはずの場所が空地になっていたときだ。その中でジニーが大泣きしているリリーを抱きながら、ジェームズとアルバスを叱りつけていた。

家はほとんど無傷の状態で、けれど二十メートルも離れた場所に、上下が引っくり返って転がっていた。

ジニーの話では、アルバスが習ったばかりの浮遊呪文を家に対して使ったらしい。「まだトロール相手に使った方がマシだったわね」

ジニーがそう言つて含みある目でハリーを見たので、目を逸らしながらもちやんと訂正した。

「あれは僕じゃなくて君のお兄さんだからね」

おぼさんの怒鳴り声が小さくなっていくと、ハリーは再び日記帳に向かった。羽ペンにつけたインクは乾いてしまったので、またペン先をインクに浸す。

数秒ほど何を書こうか迷った後、ハリーは一番最初のページにペン先をつけた。

——ハリー・ポッター。

自分の名前を書き終えて、ハリーは待った。すると、文字が一瞬光った後、あとかたもなく消えてしまった。ハリーはゆっくり息を吸い込む。

息を吐き出している途中で、文字が消えたページにインクの染みが浮き上がり始めた。それはだんだん形を作り、文字になっていく。

現れた文章は随分と親しげな口調だった。

——それは、君の名前かな？ ハリー。

浮かび上がった文字が薄くなっていった。紙がまた白紙になると、ハリーは羽ペンをページに滑らせた。

——うん、そうだよ。君は誰なの？

こうして、ハリーとリドルのやり取りが始まった。

楽しい交換日記と言うより、腹の探り合いだな。ハリーは苦笑する。

わざわざリドルの記憶を目覚めさせるのには、理由があった。

「戻った」原因も知らず、いつ元に戻るかも見当もつかないが、一つ確かなのはハリーは再びヴォルデモートと戦わなければいけないということだ。

ホグワーツの戦いが終わった後、一生分の厄介を味わったと思っていたが、まさかまたそれを一周する羽目になるなんて考えもしなかった。

けれど、こうして前のとときの知識がある今、同じ場所をなぞろうとは思わない。

もし可能ならば、あのととき出来なかったことをやり直したい。それは、過去に戻った人間としては普通の感情だろう。

失った命を、失った時間を、取り戻せるなら取り戻したいと、「戻って」来る前からずっと思っていたことだ。

大切な家族に大切な友人、普通の少年としての青春時代を失わずに済むのなら、ハリーは今持っている全てを賭けて戦いたいと思っていた。

今のハリーは、ヴォルデモートの倒し方がある程度知っている。もちろん、知識があつたからと言ってヴォルデモートを簡単に倒せるわけではない。

ダンブルドアが言っていたように、例え命が一つしかなくても、ヴォルデモートという闇の魔法使いはとても強力な存在だ。

だが、ヴォルデモートの命を一つだけにすることは決して損ではない。今できることは分霊箱を集めて破壊しておくことだ。

一つはこの日記帳。レイブンクローの髪飾りはホグワーツの必要の部屋にある。ゴーンの指輪はゴーンの家に。スリザリンのロケットはグリモールドプレイスにあり、ハッフルパフのカップはベラトリックス・レストレンジの金庫にある。

最後の二つは、入手が困難だ。いずれにせよ、取りに行かなければならないが、今すぐは難しい。

分霊箱は他にあと二つあったが、その一つである雌蛇のナギニはまだ分霊箱ではないはずだ。ヴォルデモートが肉体を完全に取り戻す前に、リドルの館の管理人をしていたフランクという老人を殺して、ナギニを使った分霊箱は完成した。

最後の一つはハリー自身だ。これはもう考える必要もない。

次に重大なのが、分霊箱の破壊方法だった。

ハリーが知っているやり方は、バジリスクの牙で刺すか、そのバジリスクの毒の性質を吸収したグリフィンボールの剣で壊すか、悪霊の火を使って燃やすかの三つだ。

悪霊の火をハリーは出すことが出来るし、上手くコントロールして消すことも出来

る。

しかしあれを行うには、広いスペースと膨大な力が必要だった。やり方も知ってて、適応できる魔力もあるが、呪文を放つこの体もつか分らない。

強力な魔法を放てる条件として、先天的な魔力の量の他に後天的要素が揃うことも必要だった。杖の忠誠度、精神力、体力、肉体の強靱さだ。杖や精神力には全く問題ない。しかしだ。

ハリーは自分の体を見下ろす。

クイディッチをしているから、普通の子より鍛えられた肉体をしているだろうが、それでもまだまだ子供の体だ。大人の体力と肉体の強靱さに比べれば劣ってしまう。

もし今の体で強力な呪文を放てば、その呪文が本来の威力を発揮しないうえ、数日寝込む可能性もある。また、強い魔力の放出をコントロールできる肉体の強さがなければ、魔法は暴走するし、最悪の場合、杖を持っていて腕が千切れてしまうかもしれない。経験上、ハリーは自分に見合わない魔法を使おうとした魔法使いの末路をよく知っている。

だから悪霊の火は却下だ。なるべく使わないほうがいい。

となると、バジリスクに会わなければいけないのは確定となる。グリフィンドールの剣を手に入れても、結局バジリスクを剣で殺さないと意味がないのだから。

そうなれば、グリフィンドールの剣を手に入れるのも手間だ。戦うことが変わらないなら、そのままバジリスクのところへ行った方がいい。

バジリスクは秘密の部屋のその奥で眠っている。主人、つまりスリザリンの継承者が呼び出さないと目覚めない。

しかしハリーは蛇語で入り口を開けることが出来ても、バジリスクを操ることが出来ない。パーセルタングを話せても、バジリスクはリドルの命令にしか従わないのだ。かつて、リドル本人がそう言っていた。

その理由が、ハリーが本当のスリザリンの血筋じゃないからなのか、リドルが調教したからなのか、あるいはバジリスクとの相性が関係しているからなのかは分からないが、分からないからこそどうしようもなかった。

たぶんバジリスクのねぐらは、あのスリザリンの像の口の中だろう。そこにいるバジリスクを引つ張り出すことはまず無理だ。像の口を強引に開けたとしても、毒蛇の巣穴に入っていくのは賢明な行為といえるだろうか。目を覚まさなくても、バジリスクの息にも毒は含まれている。

仕方がないが、バジリスクの牙を手に入れるには本人から外に出てきてもらうしかない。

だからリドルを呼び戻すのだ。彼に協力してもらおう。



ハリーはジニーのようにリドルに取り憑かれない自信があった。まずハリー自体が分霊箱だ。分霊箱に掛けられている呪いの影響は受けても、魂を吸われるようなことはないだろう。もしリドルがハリーの中に入り込んだとしても、彼の魂はハリーの中にとどまることが出来ない。それはホグワーツの五年生のとき、魔法省で一度ヴォルデモートに取り憑かれた出来事が実証している。

リドルが殺しにかかってくる可能性もあるが、殺される可能性は低いだろう。

ハリーにはリリーの護りがあるため、成人になるかダーズリーに家を追い出されるまではアバダ・ケダブラの呪いでは死なない。アバダ・ケダブラ以外の呪いなら、苦戦するかもしれないが今のハリーになら勝算がある。他にマグルの方法でならハリーは殺せたが、リドル自身その方法は考え付きもしないだろうし、ましてや赤ん坊の頃に自分を倒した「生き残った男の子」を、リドルに言わせれば凡庸なマグルのやり方で殺したがるわけがない。

特別なことに異常なほど拘る。

ハリーはそんなヴォルデモートの性格を熟知していたから、それを利用した交渉材料は用意してある。賢く合理的な男だから、自分に利があると分かればハリーに敵対せず協力をしてくれるだろう。だが油断も出来ない。リドルの存在は、諸刃の剣だ。気をつけなければ、血を流すことになる。それも大量の。

ハリーがトイレから出ると、ワイズリーおじさんが目の前に立っていた。廊下の暗がりに立っている大きな体に、思わず、日記帳を突っ込んでいるポケットを抑える。まさかトイレの中のことを知られてしまったのかと緊張が走る。彼は魔法をかけられた道具に詳しいから、日記帳の禍々しい何かに勘付いてしまったのかもしれない。

「ハリー、大丈夫かね。腹の調子でも悪いのかい？」

上からブルーの瞳に見つめられて、背筋が強張る。

「いいえ、大丈夫です」

動揺する気持ちを抑え込んで、ハリーは落ち着いて答えた。

するとワイズリーおじさんは人の良さそうな笑みを浮かべた。

「モリーが、君が長い時間トイレに籠っていると心配しててね。余計なおせっかいだったね」

ハリーの小さな頭に、おじさんの乾いてささくれた手が乗せられた。微塵も疑った様子は無い。そうだ、ワイズリー家の人柄を知っていれば、彼らがハリーを疑うような人間じゃないのは明らかだ。

つい闇祓いをやっている癖で、何もかも深読みしてしまう。

ハリーは小さく息を吐いて、おじさんに笑みを見せた。

「いいえ、そんなことないです……ありがとうございます」

はにかんで紡いだ言葉に、おじさんは目を嬉しそうに細めて、ハリーの頭を撫でるのだった。

## 帰つてきた翌朝

緑色の仄暗い明かりの下を、男は一直線に歩いていった。

目の下は薄く色素沈着し、眼窩に沿うように刻まれた皺が頬の上まで続いている。黒く硬質な髪は白髪まじりで、前髪が下ろされて額を隠していた。青ざめて疲れ切った表情をしているが、引き締まった顔立ちや伸びた姿勢が若さを僅かに残している。

「どけ、どけって言ってるんだ！」

男の歩く廊下の先の角で、騒ぎが起こっているらしい。

悲鳴と怒鳴り声が上がリ、不規則な足音が魔法省の黒光りした廊下に反響する。それが鼓膜を揺さぶった所為で、男は吐き気を感じ眉間を寄せた。今の彼はとても繊細だった。もう六日も職場に泊まっており、体は疲れ切っている。

乱暴に地面を蹴る音が、どんどん男に近づいてきた。

角を曲がってきたのは、三人の粗暴な外見の者たちだった。その瞬間、男は彼らに杖を向けた。さきほどまでの疲れた表情は消え、素早い動きだった。

三人は見えない壁にぶつかつた。後ろに引っくり返り、慌てる間もない内に、体が何かに引っ張り上げられる。宙に浮いた男たちの体に、どこからか現れた縄が巻きつく。

すっかり拘束された彼らの前で、男は杖を下ろした。

粗暴者たちは身を振って拘束を解こうとするものの、魔法で吊りあげられているため足が空を切るばかりだ。

「局長！」

角の向こうから、複数の足音と若い声が上がった。男と似たような恰好をした若者たちが走ってくる。

「ああ、局長、すみません！」

三人の若者たちは男の下へ駆け寄った。全員、やつと二十歳を迎えたという幼さが残る顔立ちをしている。それでも彼らは三年の訓練を積んだ闇祓いで、目の前にいる男の部下だった。

「えっと、彼らが今日の尋問の対象で」

女の闇祓いが言った。口が渴いているのか、乾燥した声だ。男がまだ残る頭痛を耐えながら、彼女に微笑む。

「知っているよ。私が担当することになった」

三人は眉尻を垂らした表情で同時に目配せし合った。

今度は、短い金髪のまだニキビが残る男の闇祓いが口を開く。

「あの、運んでくる途中で、その、逃げられてしまいました」

「その話は後にしよう」

三人の若者は、安心したような怯えているような複雑な表情になった。

男は杖を振って、縛り上げている内の一人を前に出した。まだ諦め悪く体を振じって逃げようとしている。

「やあ、君がこのチームのリーダーだって？ どうだ、少し私と話をしないか」

男はリーダーに向かって、柔らかく微笑む。リーダーは手入れもしていない長髪を肩まで垂らし、ピアスをあちこちに開け、目の周りを黒い色で太く塗っていた。不健康な外見からは年齢が推測しにくいのが、まだ二十代くらいのはずだ。唇は荒れ放題で、服装も汚らしい。あちこちが破け、何日も洗っていないような色をしていた。しかし男は、自分の息子たちの世代で、これがむしろオシャレという訳の分からない流行があることを知っていた。

「書類を」

リーダーから目を逸らさずに、男は部下たちの方に手を出した。黒人の若者が慌てて手に持っていた皮のカバンから紙の束を出す。

差し出された書類の尋問官の署名欄に、男は杖で「ハリー・ポッター」と記入した。

尋問室は、シンプルな作りだった。正方形に間切られた小部屋は、尋問される側をリラックスさせるためか、四方が黒タイルで覆われている魔法省の中では珍しく淡いク

リーム色の壁だ。

中央に、木のテーブルを挟んで対面式に置かれた椅子が二つと、部屋の角に記録係が座る用の椅子と机が置かれている。尋問される者が座る椅子は、逃げださないように魔法で尻を接着する仕組みだった。

ハリーとリーダーが向かい合って座り、記録係に女の部下を選ぶ。ハリーとリーダーそれぞれに男の部下が二人ついた。

ハリーは部屋の中が暑く感じた。それに息苦しい。部下に空調の魔法が効いているのか確認すると、問題ないことを告げられた。闇祓いの制服の第一ボタンを外したい衝動を抑え込んで、書類をめくりつつ、当たり障りのない会話から始めることにした。

ゴロツキ相手の尋問は、どうせ形式だけだ。叩いたところで何も出るわけがないのだから。そんなゴロツキ達が近頃やけに暴れていて、ハリーはうんざりしていた。今日も家に帰れなかったら、ジニーの「無言の責め」が執行されることはまず間違いない。しかし若い闇祓いたちに、今後の勉強をさせておかなければいけない。

ハリーは書類の一番最初を見た。

「それで、君の名前は——」

「闇の帝王は復活する！」

ハリーが名前の確認をしようとしたのを遮って、目の前の男が叫んだ。不健康な顔

が、興奮で煉瓦のような色になっている。

「闇の帝王？ それは誰のことかな」

怒ることはせず、静かに聞き返す。すると男は粘着質な笑みを浮かべた。

「知っているだろう。お前はよく知っているはずだ」

男がハリーの額辺りを舐めるように見る。

「なるほど。だが、そのよく知っているはずの私が思うに、ヴォルデモートはもう復活しない。彼は死んだんだ」

「闇の帝王」と崇拜する者の名に、男はひるまなかつた。ハリーは感心しかけたが、書類で彼が二十歳だと分かると肩を竦めた。なるほど、怯えるわけがない。ホグワーツに入学したばかりの頃のハリーと一緒にだ。

「生き返らせるんじゃない。連れて来るんだ」

「は？」

ハリーは彼が支離滅裂になっているのではないかと心配しかけた。男はハリーの目を見つめた。ハリーに対して開心術をしようと思っていけないのなら、実に愚かな行為だ。それにもし開心術を仕掛けられたとしても、若いゴロツキに心を破られるようなハリーではない。もつとも、その程度なら闇祓いになれるはずがない。

忙しなく瞳を動かしてハリーの顔色を窺いながら、男は意地汚い笑みを引つ込めた。



真面目な顔を見ると、確かにあの三人組の中ではリーダーに向いていると思わせる程度の賢さが見えた。

「冗談だと思っているんだろう、なあ。でも本当だ。連れてこられるんだ」

「連れてくる？ それは……過去から？」

言葉を引き継ぐと、リーダーは素直に頷いた。隙があり過ぎる。

「ああ、そうだ、それだ」

「全てなくなっているはずだから可能性は低いけど、もし君が逆転時計を持っていても、ヴォルデモートは復活できない。彼が死んだことは決定事項だからな。逆転時計は、既に起こった事実は変えられない」

ホグワーツの三年生だったとき、ハリーは後見人のシリウスと、ハグリッドが大切にしているヒツポグリフを逆転時計で救ったことがある。しかし、ヒツポグリフのバックブイックは処刑されたと思い込んでいただけで、実際にそうなるところは見ていないし、シリウスに至っては間もなくディメンターにキスされるといふ心配が先だって行動した。

彼らが助からないという結果をハリーは知らなかった。だからこそ救えたのだろう。

男は小さな虫が顔の周りを飛んでいるかのように頭を振った。

「違う、逆転時計じゃない」

「どういうことだ？」

収まりかけていた頭痛がまた始まった。若干、吐き気も感じる。しかし今は尋問中だ。ハリーは平静を装いながら問うた。すると男の顔に再び厭らしい笑みが戻る。

「お前、何も知らないんだな。ハリー・ポッターはなあんにも知らない」

「なら君は何を知っている？」

リーダーは鼻を鳴らした。

「教えるわけがないだろう、馬鹿め」

偉ぶった態度だった。自分が闇祓いの局長でも知らないことを知っている、そんな優越感が顔に滲んでいる。

ハリーは微笑んだ。

「君のために聞いたんだ。勝手に頭の中を弄繰り回されるのは、嫌だろう？」

頭痛を堪えながらゆっくりと立ち上がったハリーは、男の背後に移動した。縛られたまま動くことのできない彼は、背後を取られて落ち着きなく体を揺する。

「開心術をかけられたことは？」

瘦せこけた肩に手を置いて、ハリーは優しい声音で尋ねた。

きつとないだろう。あつたとしても、彼のように訓練を積んでいない者は心を覗かれていることに気づけもしない。

リーダーの目が不安そうに揺れて、ハリーを見上げる。

「怖がらなくていい。なるべく丁寧にやろう。ああ、抵抗はしないほうがいい。うっかり」最後の言葉を強調して、続ける。「間違えると君の頭が今後どうなるか分からないからな」

ハリーはわざと杖を緩慢な動作で持ち上げた。

「俺は何も知らない」

男はすぐに白旗を上げた。青ざめた顔を見て、ハリーは目を細める。

「ほう」

「本当だ。ただ、そうできるってことを聞かされただけだ」

「誰から」

唇を戦慄かせて白状していく男に、ハリーは更に問いかけた。

「最近噂になってる。俺たちの間で……誰が言ったかは分からねえ」

ゴロツキの間で噂になっている。きつとノクターン横丁あたりでは、この話題が盛んに飛び交っているのだろう。

「随分ゴシップ好きなんだな、君らは。私の伯母さんを思い出すよ」

「ロック歌手に憧れる、ティーンエイジャーみたいな奴だ」

突然、金髪の闇祓いが口を挟んで笑った。

「こういう奴らは、ヴォルデモートを称えれば、自分はワルになれるって思ってるんです」  
「よ」

するとリーダーの目が大きく見開いて、笑った部下を睨みつけた。

「闇の帝王は復活する！ 復活する！ 復活する！ 復活する！」

体を前後に激しく揺らして、唾を飛ばしながらリーダーは部下に向かって何度も吠えた。部下の表情が怯む。

ハリーは軽く杖を振った。男が糸の切れた操り人形のように前のめりに倒れる。顔がテーブルに叩き付けられ、涎が散った。

「次からは」ハリーは低めの声で言った。「尋問しているときには口を挟んじやいけないよ」

優しい口調だが、部下を見るハリーの目は厳格だった。

「すみません」

縮こまる部下から視線をずらし、失神している男の頭部から数本の毛髪を引き抜く。

「これを使って、彼らの噂の情報を集めてくれ」

金髪の部下に髪の毛を押し付けた。

「得られるものは少ないだろうが、やってみても損はないだろう」

今度は女の部下に向きなおる。

「それから、内密に魔法省の役人たちの調査をしてくれ。神秘部に関わっている者を中心に頼む」

「スパイがいると?」

彼女は訝しげに眉を顰めた。

「さあ、それは調べてみないと」

「考えすぎじゃないですか。こんなゴロツキの言うことなんて、当てになるわけがない」

黒人の部下が呆れたように失神する男を見る。

「ああ、だが、全ての物事は小さな事から始まるものだ」

まだ不思議そうにする部下たちに、ハリーは肩を竦めてみせた。

「大したことがなければ、それでいいんだ。さあ、彼らを三人ともアズカバンへ連れて行ってくれ」

ハリーは部下たちにそう告げて、部屋から追い出した。

廊下から何も音がしなくなると、倒れるように椅子に座りこむ。頭が酷く痛かった。

部下の手前、弱弱しいところは見せられない。特に彼らはまだ新人だ。不安な時期に、自分が働く部署のトップが頼りないと思わされるのは惨いことだ。

額に、連続的に鋭い痛みが走る。ハリーは思わず古傷を手で抑えた。

するとそこは熱を持っていた。触れる指先に、脈が強く流れていくのを感じる。

冷たい空気が、肺に入りこんだ気がした。

脳みそを内側から押し出されるような痛みがする。視界が揺れている。目の端に涙がにじむ。

闇の帝王は復活する！

さっきのゴロツキの声が、やけに耳に残っていた。

ハリーはふら付きながら、尋問室を出た。廊下を出て、少し歩いて角を曲がったところに、移送用の暖炉がある。

暖炉脇に置いてある粉を取って、中に投げ入れた。緑の炎が起こる。

ハリーは荒い息を吐きながら、ぎこちない動きで炎の中に入った。

「アズカバン」

瞬間、世界が回りだし、吐き気がした。なんとか堪えて、焦点がぶれそうになる目に力を込める。

目的地に着くと、ハリーは倒れるように外に出た。

そこには、さきほどの粗暴者たちを連れて行った若い闇被いの部下が二人いた。丁度、看守たちに彼らを引き渡した後のようだ。暖炉から這い出てきたハリーに驚いた顔をしている。

「局長！ どうなさったんですか！」

黒人の部下が駆け寄って、ハリリーの体を起こした。

「墓地へ」

部下の肩を借りて立ち上がり、弱弱しい声でハリリーは告げる。

アズカバンは、北海の冷たい波しぶきに晒されて、室内にも冷えた空気が広がっていた。頭痛が酷くなる。

部下たちが戸惑って動こうとしないため、ハリリーは借りていた肩から手を離して一人で先へ進んだ。

「局長！」

二人は慌てて追いかけてくる。ハリリーは止まらずに前に進んだ。一瞬でも気を抜くと、意識を失ってしまいそうだった。

監獄の外は、湿気が酷く、荒れ狂った海風が建物にぶつかって甲高い音を出していた。すぐそこにアズカバンの墓地が広がっている。

たくさんの十字架が規則的に立ち並ぶ墓地は、どの墓標も味気なくて全て同じ形だった。しかしハリリーは迷うことなくある墓標を目指した。

痛む頭を抱えながら、五十メートルほど歩くとやっと立ち止まる。

追いかけていた二人も止まった。

ハリリーの目の前には、白い十字架があった。周囲にあるものと全く同じで、何の印も

ない。法で裁かれ極刑とされた者には、死んだ後に身分を示すものは何も与えられないからだ。

湿気を含んだ冷たい潮風が顔に当たる。吐瀉物は喉の辺りまでせり上がっていて、視界を保っているのが辛かった。

ハリーは深い呼吸を数回繰り返して、墓標を睨んだまま口を開いた。

「墓を掘ってくれ」

若い闇祓いたちは目を見開く。

「何を仰っているんですか」

「何の許可もなく墓を掘り返すことなんて」

ハリーは奥歯を噛み締め、すぐに後悔した。余計に額の痛みが強くなったのだ。

「責任は私が全て取る。だから、墓を掘れ！」

唸るようなボスの声に彼らは肩を跳ねさせた。慌てて杖をハリーの見ている墓標へと向けると、その土が勝手に盛り上がり、横へはけていった。穴が出来上がっていく。

ハリーは耐え切れずに、すぐ傍にあった墓標に寄りかかってそれを見ていた。

一分もしない内に、黒い棺が土の中から姿を現す。棺に乗っていた土の部分が取り去られると、ハリーは手を小さく上げて二人を止めさせた。

唇も足も震えている。指先の感覚が鈍くなっていて、持っている杖を落としそうにな



る。

それでもよろよろと墓標から身体を起こし、ハリーは棺に向かつて杖を向けた。僅かに振っただけで、棺の蓋が持ち上がり、ゆっくりと横に移動してその中身を現していく。

ハリーは、棺の中を見た。棺の中のを確認した。

短い息を吐いて、ハリーは胸を撫で下ろす。隣で部下が気持ち悪そうにえづいているのが聞こえた。

「ハリー！」

聞き覚えのある声が後ろから上がる。

「ハリー！」

振り向こうとしてよろけた体を、誰かが支えた。甘い花の香りが鼻を攪り、栗色の髪が、頬に当たる。

「ハーマイオニー。どうして君がここに」

「それはこっちの台詞よ。ここの看守から執行部に連絡が入ったの。闇祓い局の局長が、無許可で墓を掘り返しているって。あなた、何を考えているの」

頭が割れそうな痛みだ。涙が流れていくのが分かる。

「ハーマイオニー、頭が痛いんだ。傷が熱を持っている……だから僕は、もしかして」

ハーマイオニーはハリーが掘り起こした墓の中身を見た。苦い顔をしたハーマイオ

ニーは、ハリーの青ざめた顔を撫でた。

「いいえ、違う、ハリー。あなた熱があるわ。傷だけじゃなくて、あなたの額全体が熱いの。頭が痛いのは熱のせいよ」

「熱？」

朦朧としてきた意識の中で、ハーマイオニーの言葉を繰り返す。

「ここにいたら余計に酷くなるわ。家に帰るべきよ。何日も帰れていないんでしょ。ね、家に帰りましょう、ハリー。あなたたち、担架を」

ハーマイオニーは自分の着ていたマントをハリーに巻きつけた。

「ハーマイオニー」ハリーは伝えなければいけないことがあった気がした。

「話しちゃダメ。目をつぶって」

ハーマイオニーが熱を持った頭を撫でる。少しだけ痛みが和らぐ気がした。

「ハーマイオニー、もしかしたら、戻ってくるかもしれないんだ」

「戻ってくる？ 何のこと、ハリー。いったい、何が戻って来るって言うの？」

ハリーは痛む頭が、痺れてきたような気がした。ハーマイオニーの顔が滲んでよく見えない。まるで、自分の息が、ガラスを挟んだ向こう側から聞こえているようだ。

「戻って来るかもしれない……死んだはずの」

ヴォルデモート卿が。

最後の言葉は声にならず、ハリーは悲鳴を上げた。

頭の痛みが最高潮に達し、目の奥で光が弾け、金属がぶつかり合う激しい音がした。音はまだしている。まだ続く。

「起きて！ 起きるんですよ！」

ハリーは飛び起きた。懐かしい声と共に、金属がぶつかる音が響いている。

そこは冷たいアズカバンの墓地ではなく、リンネルのシートの上だった。夏の太陽と、暖められた木の匂いがした。

体が汗で湿っている。心臓の動きが早い。ここはどこだろう。自分が今どこにいるのか分からない。

夢を見ているのだろうか。ハリーは立ち上がろうとして、後ろによろける。ひざ裏に何か当たったかと思うと、弾力のあるものの上に尻餅をついた。

「イタツ、ハリー、僕の上に乗っからないで！」

ロンの声だ。飛び上がりそうになって、ハリーは思い出す。そうか、昨日「戻って」きたんだ。ここが現実でさっきのは夢だ。いや、違う。さっきのも現実だった。だけど過去のことだ。一昨年夏の終わりごろに、実際にハリーが体験した出来事だった。

ハリーはロンのお腹から腰をずらして、ベッドに腰掛けた。足を伸ばして、眼鏡を探す。指先に冷たい感触がして、それを足の指で拾い上げた。

はつきりした視界に映ったのは、昨日も見た光景だ。

すると、ロンの部屋の戸が開いた。

「あら、ハリー、起きてたのね。おはよう」

ウィーズリーおばさんがハリーを見て優しく笑う。その手には、空のフライパンとお玉が握られていた。

次におばさんは、ベッドに転がっているロンを見て目を吊り上げた。フライパンをお玉で強く叩き始める。

「ロナルド・ウィーズリー！ さっさと目を覚ましなさい！」

金属音が部屋中に響いて、ハリーの鼓膜に突き刺さった。枕で両耳を塞ぎながら、ロンが呻く。

「今日はなんにも予定がないのに、なんで早く起きなくちゃいけないの？」

くぐもった声を、おばさんは耳ざとく拾った。

「早いですって？ すっかりお日様は昇っているし、ベーコンも卵もとつくに焼けています！ あなたもフレッドもジョージも、夏休みだからって昨日は夜更かししたみたいだけど、朝ごはんの時間は変えませんかからね！」

枕越しでも十分耳に通る声で怒鳴った後、おばさんはハリーに向かってまた笑いかけた。

「お顔を洗っていらつしやい。そしたら下に降りてきて、朝ごはんにしましょう」

扉が閉められると、再び外でフライパンが殴られる音が鳴りだした。

「フレッド！ ジョージ！」

ハリーはその声が遠ざかっていくのを聞きながら、ため息をついた。「戻って」きてから初めて夜を越した。手の甲を見ると相変わらずつるつるで、左手の甲に戒めの文章が刻まれていることもない。

もうしばらく、この世界で過ごすことになりそうだ。どのタイミングで元に戻るのか、あるいはこのまま一生戻れないのかも分からないまま。

ハリーはおばさんの言いつけどおり、下へ降りる前にバスルームへ寄った。

顔を洗って水気をタオルで拭いた後、眼鏡を掛ける。

目の前の鏡に映っていたのは、幼い子供の顔だった。昔のハリーだ。顔には筋肉もついていなければ、髭も生えていない。頬から顎にかけてのラインは、なだらかで滑りがいい。

鼻は小さく、唇は血色のいい赤だ。真っ黒の髪は、生命力を示しているように力強く生えている。疲れなんて、微塵も感じさせない。

しかし、母親譲りの目だけは違和感があつた。

位置も、形も、輝きも、子供のものなのに、その緑の向こうには疲れ切った中年の男

がいるのだと思うと、気味が悪い。

鏡の中のハリーが眉間を寄せた。

「おっ、なんだ、ハリー。自分のハンサムさに見惚れてるのか？」

突然、バスルームにジョージが入ってきた。ニヤついている顔を見て、ハリーは慌てて洗面台から離れる。

「ママが心配してるぞ。早く降りて来いよ」

「今いく」

使ったタオルを物干し竿に掛けて、ハリーは急いでジョージの後を追った。

## ホグワーツまでの旅

夏休みが終わりに近づくにつれ、ハリーはあることで頭を悩ませていた。

マルフォイ家の屋敷しもべ妖精であるドビーのことだ。

ルシウス・マルフォイがトム・リドルの日記を使って、秘密の部屋の怪物を放とうとしていると知ったドビーは、その怪物からハリーを守ろうとしてくれた。それで「一度目」の二年生のときに、酷い目にあつたのだ。

ドビーはハリーが学校に来なければ大丈夫だろうと考えて、ハリーのホグワーツ行きを邪魔した。

友達の手紙を妨害することから始まり、九と四分の三番線への通路を閉じて汽車に乗らせないようにしたり、クイディッチの試合でブラッジャーに追いかけてさせて大怪我させたりと、とにかく無茶苦茶だった。

ハリーが「戻って」きたときに、既にハリーはウィーズリー家にいたからもうドビーとは一戦を交えた後だった。次に会えるのはキングズ・クロスに行ったとき、つまり当日だ。

マルフォイ家で働く彼を簡単に呼び出せるわけもないし、ハリーがホグワーツ特急に

乗れないことはドビーの気が変わらない限り、絶対に変わらないだろうが、ほぼ確定だった。

ただ、二度もフォードでのそこまで快適じゃない旅に出る気はない。今度こそ運が悪くて、暴れ柳にミンチ肉にされるかもしれないし、またダンブルドアに失望された目を向けられたくなかった。

かと言って、ロンと二人でキングズ・クロス駅で迎えを待つつもりもなかった。あんな人通りの多い、それも新学期が始まるような時期に、十二歳の少年二人が奇怪な荷物を持って立ちすくんでいるのは目立ちすぎる。

一番いいのは、ウィーズリーおじさんと行動を共にすることだろう。

それならば、取るべき手は一つだ。

翌日、早朝からウィーズリー家は騒がしかった。あれがないこれがないとみんなが家を走り回り、やつと車に乗れた後も、出発しては一人が忘れ物を思い出し、また出発しようとしても誰かが忘れ物を思い出し、と何度も家に戻る羽目になったせいでもかなり時間が押していた。

車内は苛立つた空気に包まれていたが、ハリーはこれでいいと思った。

ドビーが待ち構えているなら、ハリーの後からやって来た人たちもみんな巻き添えを喰う。被害者は少ない方がいい。



「ジョージ、汽車に乗るまでヘッドウイグを預かっててくれない？ 今日僕とは話したくない気分らしいんだ」

ハリーは隣に座っていたジョージに頼んだ。ジョージはなぜハリーがこんなことを言いだすんだらうという顔でハリーを見たが、それ以上深く追求することなく快諾してくれた。

一行が九番線と十番線のホームの間に着いた頃、時計は出発の五分前を示していた。急ぐウイーズリー家よりもさらに早足でハリーはカートを押して、一番前に出た。

目的の柵が見えた時、ハリーは後ろを振り向かないまま言った。

「僕が先に行きます」

おぼさんの返事も聞かずに、ハリーはカートを押して小走りで柵に突っ込んでいった。

かなりの確率で、柵はハリーを跳ね返すかもしれない。そうだろう、ドビー。ハリーは柵を見つめた。

「待つてよ、ハリー」

後ろから追いかけてきた声に、思わずハリーは振り返った。ロンだ。

「え、君まで——」

そのとき、壁にカートがぶつかる鈍い音と衝撃が同時に起こった。カートの持ち手が

ハリリーの腹に食いこみ、息がつまる。そこにさらにロンが突っ込んできた。

二つのカートはぶつかり合い、荷物とロンとハリリーは地面に投げ出される。

ロンの悲鳴が聞こえた。

ハリリーは地面に打ち付けられる前に、足の筋肉と腹筋を使って体勢を保ち、転ばずに済んだ。闇祓いの訓練の一環で、体術をやっていたおかげだ。しかしロンは荷物と一緒に地面に転がっていた。

「まあまあー！」

「いったい、どうなってるんだ」

ウィーズリーお婆さんとおじさんがハリリーとロンに駆け寄った。お婆さんがロンを起こしている間、おじさんは困惑した顔で柵に手を当てた。

「まさか、通れなくなっているのか？」

「どうするの、ホグワーツには行けないの？」

カートの持ち手を強く握って、フレッドが心配そうな声を出す。

「ひとまず、車へ戻ろう。私たちは目立ってしまっている」

おじさんの言う通りだった。プラットホームに居た客たちの何人かが、もの珍しい装いのハリリーたちを疑り深く見ている。さらに近くに居た駅員が眉間を寄せて叫んだ。

「いったい、どうしたんですか！」

ウィーズリーおじさんは帽子を頭から取って、なんでもないと叫び返す。

「どうやら、この子たちのカートがいかれてしまったようだ」

誤魔化すような笑みに、駅員の顔がますます疑うようなものになった。ウィーズリー兄弟たちに荷物を戻すのを手伝ってもらってから、ハリーたちは慌ててその場を去った。

再びフォードに乗り込むと、珍しいことにパーシーが後部座席から身を乗り出した。普段なら絶対にそんな無作法なこととはしないはずだ。

「どこへ行くんですか？ 父さん」

「ダイアゴン横丁だ」

おじさんは前を見つめたまま答えた。

「まずは学校側と連絡を取ってから、どうするのか決めよう」

こうしてハリーたちは、キングズ・クロスに一番近い魔法使いの商店街、ダイアゴン横丁へと向かった。

漏れ鍋に着くと、早速ウィーズリーおじさんは暖炉に頭を突っ込んだ。しばらくすると、マクゴナガルの顔が暖炉に浮かぶ。ハリーたちは少し離れたテーブルについて、おじさんがマクゴナガルと話し合う様子を窺っていた。

「はい、はい、ええ、分かりました、そうします」

暖炉から顔を上げたおじさんに、パーシーが詰め寄った。

「それで、どうするんですか？」

「煙突飛行でホグズミード村まで行くことになった。ホグズミードに着いたら、学校側が迎えをよこしてくれるらしい。よし、じゃあ車から荷物を下ろすぞ」

ハリーたちは、漏れ鍋の煙突からホグズミード村の郵便局の煙突まで移動した。郵便局はふくろうの臭いと鳴き声で溢れていた。

郵便局を出る前に、おじさんたちは杖を振って荷物を浮かせる。ここは、イギリスで唯一の魔法使いだけの街だ。堂々と魔法を使っても、何も問題はない。

通りに出ると、ホグズミード村の店はダイアゴン横丁ほどではないがほどほどに賑わっていた。

夏のこの時期にホグズミードへ来るのは、大人のハリーも初めてだった。

ホグズミード行きが許可されるのは早くても十月の下旬からで、夏休みは六月辺りから始まる。

九月初めのホグズミードはまだ少し暖かく、それぞれの店の入り口の脇には、色とりどりの可愛らしい花が咲き誇っていた。

奥の方には山が立ち並ぶものの、村の周辺は開けていて昼の太陽を満遍なく浴びているためだろう。

真上から降り注ぐ日差しが、大通りの石畳に照りつけていた。

だが、山から吹いてくる風に少し冷たいものが混じっているのをハリーは感じた。季節はすっかり秋だ。ここから一気に気温が下がり始めて、夏よりも曇り空が増えてくる。

「ラッキーだぞ。普通、ここには三年生になってからじゃないと来れないんだから」

ジョージがハリーとロン、ジニーに言った。

「ゾンゴの店だ。ねえ、ママ」

フレッドがおばさんを上目づかいで見た。

「ダメですよ。お迎えが来るまで、三本の箒で待つておくんです」

「私は魔法省に連絡を取って、魔法運輸部の者に今回のことを伝えなければいけない。先に行つててくれ」

おじさんは郵便局へ戻つて行き、ハリーたちはホグズミードの中でも特に人気の居酒屋である「三本の箒」で昼食を取った。

清潔で広々とした店内は、繁盛期よりは人が少ないものの、昼時のためか賑やかだった。店主のマダム・ロスメルタが、昼間から酒を飲んでいる男連中を相手にしている。最後に見たときより若々しく、体の曲線もより明確だ。

「ウワー、これ、すつごくおいしいー！」

ロンとジニーがバタービールを飲んで歓声を上げた。  
「ねえ、ハリー。君も飲んでごらんよ」

トウモロコシに齧りついてたハリーにロンが勧める。ハリーはバタービールのグラスを持って、口を付けた。いつも通りの美味しい味だ。

ジニーとロンを見ると、二人は夢中になってバタービールのグラスを傾けている。最初の頃は自分もあんな風だったなど、ハリーは微笑ましくなった。

ハリーたちがホグズミードについてからもう二十分以上経った。しかしウィーズリーおじさんは中々戻ってこない。おばさんが少し落ち着かなくなっていた。

「アーサーったら、まだ戻ってこないのかしら。母さんは父さんの様子を見てくるから、パーシー、この子たちをお願いできる？」

お婆さんの頼みに、パーシーが厳格な顔で頷いた。

「おっ、パーシーがリーダーだぜ」

フレッドが茶化すと、お婆さんとパーシーが同時に睨みつけた。フレッドはお婆さんの方を見て口をつぐんだ。

それから五分以上が経過したが、様子を見に行つてくると言っていたお婆さんも中々戻ってこなかった。

子どもたちが大人しく昼食を続けている中、パーシーが時折、目を細めてみんなを見

回す。フレッドやジョージはいつもみたいに賑やかで、ロンも何も考えずに料理を食べていたが、ジニーはだんだんと口数が減っているのがハリーには分かった。それに、入り口の方にちらりと視線を寄越すことが増えている。初めてのホグワーツ行きなのに、最初からトラブル続きであることが不安なのだろう。

ハリーはジニーの為に、そのまま出されていた熟れた林檎を切ってあげることにした。食事とセットで出てきたナイフを使ったが、切れ味が悪くなかなか上手く刃が滑らない。久々にナイフを使ったというのものもあるだろうが、酷くがたがたになった林檎の表面にハリーは首を傾げた。そんなハリーの目の前に、何かが差し出される。

「ほら、ハリー。これ使えよ」

フレッドが小さな果物ナイフをハリーに渡す。

「どうしたんだ、そんなもの」

それを見ていたパーシーが驚いた顔をした。

「去年、ハグリッドに貰ったんだ。酒場のゲームで当たったけど、小さいから俺らにあげるって」

「そんな危ないものを持ち歩いてるのか？」

パーシーの咎める声に、ジョージが肩を竦める。

「パーシー、俺たちが所構わず人を刺しまくるような殺人鬼にでも見えるのか？」

「そう言うことじゃないだろう。持っていると怪我をするぞ」

「パーシー、俺たちがちっちゃな三歳の子供にでも見えるのか？ それにこれは刃がしまえるから、大丈夫だ。学校の外で魔法が使えないと、こういうのが必要になるからな」フレッドはハリーに、ナイフの刃を折り畳んで柄の木の部分にしまうところを見せた。

それから再び時間が経ったが、ウィーズリーおじさんとおばさんは全く戻ってこない。

「ママが行ってからもう二十分以上経ってるぜ。そんなにもめてるのか？」

「単なる事故ではないのか？ もしかしたら、あの通路を誰かが塞いだのかもしれない」  
「だとしたらきつとマルフォイド。ハリーと僕らが学校に行くのを嫌がるのはマルフォイくらいなもの」

ジョージとパーシーの会話にロンが割り込んだ。

「当たらずも遠からず、だ。ハリーは苦笑する。実際には、マルフォイ家に従える屋敷しもべ妖精が、ハリーに対する純粋な善意で起こしたことだけけれど。」

パーシーが入り口を気にしながら口を開いた。

「迎えの職員も中々こないな」

「なあ、来るとしたらマクゴナガルが迎えにくるのかな。だって俺らはみんなグリフィ



ンドールだし」

ジョージの言葉にフレッドが付け加える。「ジニーはまだ違うよ」  
「私も絶対グリフィンンドールよ！」

ジニーが珍しく強い口調で反論した。未来で夫になつてゐるハリーにも、滅多に見せない姿だ。

「マクゴナガル先生は副校長だ。今はきつとお忙しいだろう」

「じゃあ、ハグリッドかもしれない」

パーシーの意見にハリーが可能性を上げると、ロンがバタービールを飲みながら歓声を上げた。

「それなら最高。まあスネイプじゃなければ誰だつていいんだけどね。絶対、僕らが汽車に乗らなかつたことをぐちぐち言うに決まつてる」

「スネイプと言えば」フレッドが呟いた。「やつは今年も闇の魔術に対する防衛術の教授を逃したんだ」

ジョージが頷く。

「ああ、ロックハートの大ファンには見えないもんな」

「よくお分かりのようだ」

ハリーのすぐ傍で、苛立ちを抑え込んだような低い声がした。みんなが一齐にそちら

を向いた。

スネイプだ。

痩せた体軀に黒いローブを隙なく着込み、肩まで真っ直ぐ垂れた脂っこい黒髪が、土気色の顔の周りを縁どっている。

特徴的な鉤鼻越しに、ウィーズリー兄弟を、そしてハリーを睨みつけた。

久々にその姿を見て、ハリーは息が詰まった。

こうして本人を目の前になると、湧き上がるのは様々な記憶が入り混じった複雑な感情だ。自分が知っている人の中で最も勇敢な人、ハリーは最終的にスネイプをそう評価したが、全てが憎たらしいという表情で見つめられると、真相を知っていても色々と勘違いしそうになる。

昔のハリーはスネイプに睨みつけられる度に、彼がハリーを殺したいほど憎んでいるかもしれないとよく思ったものだ。嫌っていたのは間違いないが、スネイプは誰よりも全てを賭けてハリーを守ろうとしてくれていた。ハリーの母を愛していたからだ。

皮肉なことに、母の死によってスネイプは自分を省みることが出来て、それ以降は母の意志を尊重することを何よりも優先した。母を愛して、ハリーの為に、そして魔法界の為に死んだ男だった。

スネイプは悪人でもなければ、聖人でもない。ただ、彼のしたことだけが真実なのだ。

それが何よりも大事なことだとハリーは思っていた。だから教訓の意味もこめて、息子の一人にその名を与えた。それと同時に彼への感謝と、許しも込めた名前だった。魔法界を、そしてハリーを守ってくれた感謝と、スネイプへの許し、そしてハリー自身への許しだ。ハリーはずっと後悔していた。自分が疑いを持つてスネイプに反抗的な態度を取ったことや、なによりもダンブルドアを殺したスネイプに対して言った言葉を。最後に彼に対して何もできなかったことを。スネイプを称えることで、ハリーは自分にも許しが欲しかった。

それでもなお、ホグワーツの戦いで死をハリーは一生忘れることはないだろう。

——こつち、を、見……。

ハリーの目を見つめて発せられた、弱弱しく途切れていく声は、何年経っても耳の中で色あせることはなかった。

気づけばハリーは、今のこの状況でもスネイプと視線を交わしていた。

黒い瞳が、ハリーの瞳を見ている。ただ、見ている。開心術を使われている気配はない。

本当にスネイプは、ただハリーの緑の目を見ているだけだった。

ハリーの喉が、急に縮こまった気がした。だが先に目を逸らしたのはスネイプだった。

二人の間に漂っていた空気がなかったように、スネイプはいつも通り嘲りの笑みを口元に浮かべて全員を見渡した。

「さてさて、諸君が汽車に乗らなかつたことだが」

「ちゃんと理由がある！」フレッドが叫んだ。

スネイプは眉間の皺を深くしてフレッドを睨みつける。

「黙つて聞け。君たちが目立ちたがりであることは理解しているが、グリフィンボールとは大抵そういうものだが、今回の件はどういった経緯があつたのか事前に聞いていゝる。これからホグワーツに向かうが、君たちは他の生徒が城につくまで、大広間で待機することになる。寮にはまだいけない。荷物は例年通り、玄関ホール脇に置いておけば後で部屋に運ばれる。城ではまだ歓迎会の準備が行われている。暴れて教授陣の手を煩わせることがないように。もしそうなれば、グリフィンボールが今学期一番早く減点を受けることになるだろう」

スネイプはハリーたちが絶対大人しくしないだろうと確信をもつた目で見下ろしてきた。

ハリーを除いた全員が、眉間を寄せてスネイプを睨みつけている。

険悪な空気の中を、軽やかな鐘の音が響いた。店の入り口が開いたのだ。

入ってきたのはウィーズリーおじさんとおばさんだつた。二人はスネイプを見つけ

ると、大人らしい笑みを浮かべた。

「ああ、どうも。お待たせしてしまったかな」

「いや」

おじさんに対してスネイプは無愛想に答えた。

「魔法運輸部の者がすぐに調査に行ったようだが、空間接合の魔法には何の異常も見つからなかったようだ。むしろ私たちが場所を間違えたんじゃないか、と言っている」

「僕たちは間違つてなかった!」

パーシーがショックを受けた顔で叫んだ。

「ああ、その通りだ。しかし原因がどうにも、な。そこ自体に異常がないのなら、誰かが妨害した可能性もあるが……」

おじさんは困つたように薄くなった頭を何度も撫でつけている。

「やつぱり、マルフォイだよ」ロンがハリーに囁いた。

「まあこのことは私たちに任せて、お前たちは心配しないで、学校生活を楽しんできなさい」

「お勉強に専念するのよ」

ウィーズリーおばさんが子供たちに優しく微笑んだ。フレッドとジョージがにっこり笑い返す。

「もちろん、心配しないで」

おぼさんは途端に心配そうな顔になった。

「そろそろ、出発する」

離れた位置で家族のやり取りを見ていたスネイプが、とうとうそう告げる。

みんなが店の外にでると、大通りには馬車が二台あった。一年生以外の生徒が、 Hogwarts 城へいくために使うものだ。一年生だけは、小舟に乗って湖を渡らなければいけない。彼らが遠回りしている間に、他の学年の生徒の準備を済ませておくためだった。

「ああ、かわいそうなジニー。汽車にも乗れずに、初めての Hogwarts をお舟の上から見られないなんて」

ウィーズリーおぼさんが、新入生になるジニーを抱きしめながら嘆いた。

「私、そんなに気にしてないわ」

抱きしめてくる両腕の隙間から、ジニーがちらりとハリーを見る。ハリーと目が合うと、耳の先をピンク色に染めた。

「聞いたか？ 楽しい Hogwarts 特急の旅や、闇夜に輝く壮大な Hogwarts 城を湖から見上げるよりも、ハリー・ポッターと一緒に行く方が何倍も価値があるんだと」

フレッドがにやりと笑うと、ジニーはこれまでにないほど顔を真っ赤にして、おぼさんの腕を振りほどき馬車に逃げ込んだ。

「フレッド、妹の面倒をよく見なさい。あなたたちもね」

ウイーズリーおばさんは厳しい目でウイーズリー兄弟を見回した。

そのやり取りのわきで、ハリーは馬車の前に繋がれているものを見つけた。肉のない、骨と黒い皮だけの、まるで馬の骸骨のような生き物、セストラルだ。コウモリの翼そっくりの羽根を微かに揺らしながら、そこに立っていた。虚ろな白く濁った目でハリーを見ている。死をその目で見て理解した者にしか見えない生き物だった。

体が元に戻っても、彼らが見えるのか。セストラルの生臭い息が、風に乗って鼻のあたりに漂ってくるのを感じながらハリーは思った。

「ハリー…… 何してるの、早く来なよー」

ロンの呼ぶ声が聞こえて、ハリーは顔を上げた。そのとき、視界の端に黒いものが映る。スネイプがハリーを見ていた。その目線が一瞬セストラルの方に移って、ハリーは心臓が少し縮んだ。スネイプはきつと、ハリーにセストラルが見えていると気づいたのだろうか。

スネイプが何か言ってくる前に、目線を合わせないようにしてそそくさと馬車に乗り込み、ハリーは扉を閉めた。

スネイプがもう一台の馬車に荷物を詰め込み乗り込むと、二台の馬車は砂利道をホグワーツ城に向けて走り出す。

「そうだ、フレッド。これ返すよ」

馬車の中でふと思ひ出したハリーは、折りたたみ式のナイフを差し出した。さつきフレッドに借りたやつだ。

「いいよ、ハリーにやるさ。もし去年みたいに例のあの人と戦うことがあれば、それで刺してやれ」

ハリーは笑ったが、一緒に聞いていたパーシーはあまりいい顔をしなかった。

「あれはクイレル教授が起こした事件だ。例のあの人は関係なかった」

「おいおい、パーシー、マジで言ってるのか。俺たちみんなハリーの活躍は聞いただろう！」

あまりにも驚いたジョージが椅子からずり落ちそうになっていた。だがパーシーは頑なに認めないという態度を取って、ズボンのポケットから本を取り出し読み始めて周囲を閉めだした。

「でも、例のあの人がナイフでやつつけられるわけじゃないじゃん」

ロンの言葉にフレッドが口の端を上げた。

「さすが、チェスの王者。戦い方についてはよくご存知で」

ハリーはナイフをマントの内ポケットに仕舞って、前に視線を戻す。すると変身術入門の本越しにジニーと目が合った。しかしジニーはさつと目を本で隠してしまう。



そうこうしている内に、窓の外からホグワーツ城の門が見えてきた。

「さて、諸君。一番乗りの城で何がしたい？」

フレッドが腕を組んで前のめりになった。ジョージが囁し立てる。

「何も、するな」

パーシーが本から顔を上げて二人を睨んだ。

## 組み分けの儀式

ハリーたちが城について数時間経った頃に、やっとホグワーツ特急がホグズミード駅に到着した。

一年生を除いた生徒たちが続々と玄関ホールを抜けて大広間に集まってくる。一番乗りだったグループは、既に大広間にいたハリーたちを見て驚いた顔をしていた。

汽車で監督生としての使命を果たせなかったパーシーは、それを挽回しようと張りきった様子で集団に突っ込んでいき、フレッドとジョージは同級生にさっそく自慢話をしてやろうと駆けて行った。ジニーはマクゴナガルに連れられて大広間から出ていく。他の一年生がやってくるまで職員室で待つらしい。

残ったハリーとロンは、仲のいい顔がないかと入り口を抜けてくる生徒を見回していた。すると、レイブンクロー生の群れの中にハーマイオニーの栗色でふわふわした頭を見つめる。

「ハーマイオニーだ」ハリーが言った。

「おーい、ハーマイオニー、ここだよ！」ロンが大きな声を出して手を振ると、ハーマイオニーが二人の方を向く。二人を見たハーマイオニーは途端に怒った顔をして、前のめ

りになりながら大股で近寄ってきた。

「あいつ、説教するつもりだぜ」ロンが苦い顔をした。

「やつと見つけた！　いったいどこへ行っていったの？　汽車の中であなた達を散々がしたのよ。そうしたら、パーシーもいないってグリフィンドルの監督生が話している、みんなてつきりあなた達が汽車に乗り遅れたんじゃないかって」

ハーマイオニーが言葉を切った。ハリーとロンが顔だけで笑っているのを訝しげに見る。

「まさか本当に乗っていなかったの？」

「ズ」名答

ハリーが答えると、ハーマイオニーはシヨックを受けた顔になった。もしかしたら、二人が大変な校則違反を犯したと思ったに違いない。ハリーとロンは慌ててキングズ・クロスで起こったことと、煙突飛行で他の生徒より一足先に Hogwartz に着いていたこと、そして一番重要である「きちんと大人と相談したうえで行動した」ことを話した。

「そんなにいい体験じゃなかったよ。城に着いた途端、ハリーがロックハートに捕まっただんだ。それから今までずーっと、奴がこれまで何を倒したかって話を聞かされてただから」

ロンは疲れた顔で頭を横に振る。

ハリーたちが城についたとき、当然ながら教職員だけしかおらず、クリスマス休暇のときよりも静かだった。教授たちは新学期に向けての最終確認や、歓迎会の段取りを話し合うために素早くはつきりした足取りで城の中を歩いていた。

「いつものホグワーツと違う風に見えるな。まるでパ・パが働いてる魔法省みたいな空気だ」

厳粛な空気に耐えかねたロンがこぼした。

ハリーたちは大広間で待つようにと言われた。大広間ではフリットウィックが、歓迎会の飾りのチェックをしている。それを眺めながら、これからどうしようかと話し合おうとしたとき、ハリーの名を高らかに呼ぶ声が聞こえた。

波打つ金髪を輝かせ、ハンサムな顔に意味のない笑顔を浮かべている人物が、大広間の入り口に立っている。

「げ、出た」

ロンが骨生え薬を一気に飲まされたような顔になった。

ロックハートはライラック色のマントを翻しながら、キラキラ目を輝かせてハリーに近づいてくる。フレッドとジョージは素早い動きで椅子から立ち上がり、大広間の向こう側へ行ってしまった。ジニーはフリットウィックの飾りが気になると駆けて行き、パーシーは最初からみんなと距離を取って何処かに手紙を一生懸命書いていた。

唯一、ロンは逃げるのが遅れた。

「いやはや、ハリー。まさかこんなに早く会えるとは思っていませんでしたよ。もしかして君は、他のみんなとは違う方法で新学期に登場したかったのかな？ いけませんね、そういう目立ちたがりは」

こんな調子から始まり、その後はロックハートの、正確に言えば人から奪った武勇伝を、実演を交えて延々と聞かされた。ロックハートの指示で狼男を演じながら、ハリーは自分が時を遡ったのは絶対にこの為じゃないかと考えていた。

ロンのうんざりした顔の向こうで、時々通りかかる教職員たちが吠えるハリーを気の毒そうな目で見ていた。フリットウィックは何度もハリーを心配そうな顔で振り返っていたが、話しかけてくることはなかった。関わると自分も巻きこまれることを知っているのだ。

鼻風邪を引いた雪男役をやっているハリーを見て、通りがかったスネイプがニヤリと暗い笑みを浮かべたが、ロックハートが振り返りそうになる寸前で素早く向きを変えて足早に去って行った。

それらの様子を見てハリーは、教職員たちがロックハートのお守をハリーに押し付けていることが分かった。歓迎会の準備が終わって、ロックハートが身だしなみを整えるためにやっと去った後、やけに教授たちがハリーに優しくしてくれたことで確信した。

そう説明しながら、フリットウィックから貰ったファイファイ・フィズビーや他の職員たちから貰ったお菓子で膨らんだポケットをハーマイオニーに見せる。

しかしハーマイオニーは気の毒そうな顔をするどころか、なんて素晴らしい体験をしたのだというような輝かしい顔でハーリーたちを見た。

「それじゃあ、随分と勉強できたのね。羨ましいわ」

「それ本気で言ってる？」

ロンが絶句してハーマイオニーを見た。

「教授を独り占めできる機会なんてそうそうないじゃない。すごく良い経験だったと思うわ」

「ほー、教授、ね」ロンがハーリーに囁いた。「あいつが教授と言えるかな」

「何か仰りたいことでも？」

ハーマイオニーが眉を吊り上げた。

「いいえ、なんにも。あ、ほら、ジニーたちが入って来るぞ」

ハーリーたちがお喋りしている間に、歓迎会の準備は整ったようだ。監督生たちの指示でだんだん大広間は静まっていき、みんなが入り口の扉に注目した。

扉が開いた。マクゴナガルが小さな生徒を引き連れて入ってくる。

ジニーたち新入生は不安そうな、けれど期待に満ちた顔で豪華に飾り立てられた大広

間を見回していた。

「ジニーのやつ、グリフィンボールに選ばれるといいけど」

ロンが心配そうに言った。

ハリーは当然知っていたが、ジニーがグリフィンボールに選ばれるとウィーズリー家の子どもたちはみんな大喜びした。

ジニーは緊張がやっと解けたのか、ほっとした顔でテーブルについた。

全ての組み分けが終わり、ダンブルドアが食事の合図をする。

ハリーはダンブルドアの声が聞こえる方に、顔を向けることが出来なかった。自分の中にある恥を、見透かされたくないなかつたのだ。隠すことでますますその重みが加わっていく気がする。体は戻ったのに、心はもう元には戻らない。

大人になるほど、自分の弱いところばかり目につく。しかもそれは事実で、否定することも出来ない。隠し事のある人間にとって、ダンブルドアは脅威なのかもしれない。見透かされることを恐れる卑怯者は、あのアイスブルーの瞳を避けたがる。昔はたまにしか感じなかったそれを、今のハリーは常に意識していた。ダンブルドアだって普通の人間だ。罪を裁く神などではないと分かっているのに、ハリーはダンブルドアの目が失望の色に染まるのを酷く恐れた。

「ハリーー！ 食べなよー！」

ロンが口いっぱいにステーキを頬張りながら言った。ハリーは弱く微笑んで、目の前の骨付きチキンに手を伸ばす。

かなり久々の、生徒として食べるホグワーツの食事だ。

ハリーは食事の間くらい、頭から大人らしい考えを排除しておくことにした。

友達と気楽にお喋りしながら、健康のことなんか気にせずに美味しいものをたらふく食べて、校歌を大きな声で歌う。

小さい子が怪我をするかもしれない、生徒が悪戯をしかけないか、などを心配するのは先生たちに任せて、ハリーは久々にホグワーツの宴会を無邪気に楽しんだ。

色んな種類のアイスクリームを混ぜて食べるなんて、久しぶりだろうか。

ハーマイオニーがあまり良くない顔をしている中、ロンと二人でちよつと行儀の悪い食べ方でデザートを楽しんだ。本当に、楽しかった。

その日の夜は、満足した気分で眠りについた。懐かしいグリフィンドールのベッドに身を横たえて、柔らかい感触に包まれると、ハリーは少しだけ泣きそうになった。そうしてゆつくりと、眠りの世界へ落ちて行つた。

ハリーは暗闇の中に浮かんでいた。

スリザリンはダメ……スリザリンは嫌だ。

誰かの声が聞こえる。



僕はスリザリンなんかじゃない。スリザリンは嫌だ！

暗闇の中に、組み分け帽子を被る男の子がいる。その子だけがくり抜かれたみたい  
に、闇から浮かんでいる。驚くことに、その子はハリーそっくりだった。いや、本当に  
そうなのかもしれない。

スリザリンは嫌かね？ 君は偉大になれる可能性があるんだよ。

スリザリンは嫌だ。スリザリンだけはダメ。

よろしい、それなら。

帽子が大きく口を開く。

「スリザリン！」

帽子の言葉に、男の子は絶望したように口を開く。

ハリーは手を伸ばした。筋張ったハリーの手が、男の子に近づこうとする。

けれどだんだん彼は離れていく。絶望に顔を歪めたまま。

「アルバス！」

ハリーは叫んだ。

「パ。パ」

幼い声があった。ハリーのシャツの裾が軽く引つ張られる。振り向くと、赤毛をポニー  
テールにして首元でその房を揺らしている小さな女の子がいた。

「リリー？」

ハリーは今しがた、自分が何かを追っかけていたような気がしていた。しかし、そんなわけがない。

目の前にあるのは、自分の家の明かりがついていない階段だ。目的の人物は、クリスマス休暇のために家に帰って来てからずっと部屋に閉じこもり、これから夕食に呼び出すつもりだった。

ハリーは、小さく頭を振ると、不安げな表情の娘に向き直って腰を落とした。

「リリー、どうしたんだ？」

優しく尋ねると、同じ目線の高さにある琥珀色の瞳が揺れた。

「アルとお話しに行くんでしよう。あのね、アルに伝えてほしいの。私は、私も、あと二年経てばスリザリンに入るって」

そう言うリリーの顔は曇っていて、心からスリザリンに入ることを望んでいるようなものではなかった。

「リリーは本当にスリザリンに入りたいのかい？」

ハリーの問いに、リリーは少しだけ考える素振りを見せた後、閃いたように両眉を跳ね上げた。

「だって、私だったらどこでも上手くやっていけるわ。そうでしょう？」

「ああ、そうだね」

ハリーは微笑んだ。

「でも自分が本当に入りたいところを選んだらいい。兄さんは兄さんでちゃんとやるさ」

「アルは寂しそうよ」

ハリーは、駅からずつと口を噤んで無口だった息子の顔を思い浮かべる。

「ああ……だけどその内、上手くやれるようになる。スリザリンだって悪くないって分かるようになるだろう」

そのとき、奥のリビングでジエームズの騒ぐ声が聞こえた。爆発するようなクラツカーの音と、大きな笑い声が家中に響く。

リリーが呆れたように目を回した。

「ジムの元気を半分くらい分けてあげられたらいいのにな」

「パパもそう思うよ。ほら、アルバスはパパが何とかするから、お前はクリスマスケーキを食べておいで」

リリーは父親に頭を撫でられると、くすぐったそうに肩を竦める。そしてリビングに方向を変えかけたが、「あ」という声を出してまたハリーを振り返った。

「パパ、大好きよ」

しやがんだままだったハリーの首元を抱きしめて、ハリーが「パパもだ」と返すと満  
足したように向こうへ駆けて行った。

そんな娘の後姿に笑みをこぼして、ハリーは薄暗く静まった階段を見上げた。  
深呼吸をし、気合を入れて一段目に足を乗せる。

二階はひっそりと静まり返っていた。下から聞こえてくる賑やかな空気が、ここでは  
寂しさに変わっていく。

アルバスの部屋からは、明かりは漏れていなかった。

ノックをしても、返事はない。

「アルバス、父さんだよ。入ってもいいかい？」

何も返ってこない。ハリーはドアノブをゆっくり回した。鍵は開いている。

「アルバス、入るよ」

慎重に開けた扉の向こうは、ベッドサイドの電灯すらついていなかった。杖を振つ  
て、杖先に淡い光を灯す。暗い部屋の中で、アルバスは壁を向いてベッドに横になつて  
いた。

ハリーは静かにその姿を見つめていたが、あまりにもその背が微動だにしないので起  
きているのだと確信した。

ハリーは部屋の中に入った。ベッドへと近づき、横たわっている息子の傍に腰を下ろ

す。ベッドが軋んだ音をたてた。

「やあ、アルバス。どうした、キングズ・クロスにいるときからずっと機嫌が悪いな」  
微かに上下する肩に手を置くと、掌に、子どもの高い体温が伝わってきた。

「父さんは迎えに来なくてもよかったんだ」

ハリリーの言葉から一分経った頃に、やっとアルバスは口を開いた。

「そうしたらどうやって帰るつもりだったんだ？」

ハリリーは笑いながら聞いた。

「ホームじゃなくて車の所で待つとか。それか、スコーピウスのお父さんに送ってもらった」

「そんなに父さんのことが嫌いか？」

身を乗り出して、顔を覗き込むと、アルバスは泣くのを耐え忍んでいるかのように唇を噛んでいる。

「来てほしくなかったんだ。嫌だった。どうして分かってくれないの？」

「アルバス、父さんは——」

ハリリーは言葉を切った。行きたかったんだ、お前たちを迎えに、ホームまで。それは、ハリリーがしてもらえなかったことだから。

初めてジエームズを送り出したとき、ハリリーはホームから立ち去るホグワーツ特急

に、昔とは違う感動を覚えた。

遠ざかっていく、自分の子供を乗せた汽車。寂しいようで、どこか誇らしい気持ちも満ち足りていくのを、毎度感じている。それはきつと、ハリーの両親が生きていたら感じてくれたものだろうと、想像の中で自分と両親の姿が重なる。その時のハリーは、今の家族への愛と、両親から与えられていただろう愛を、同時に感じる事ができた。

けれどこれは、ハリーだけの感情だった。ハリーは子育てをするとき、つい自分がしてほしかったことを基準に考えてしまうため、自分と子供たちはまた別の人間だということや、常々心の中で唱えなければいけなかった。

気づかれないように深呼吸をして、ハリーは口を開いた。

「アルバス、お前が周りに何かを恥じているのなら、それは感じる必要のないものだよ。周りを気にする必要なんて全くないのだから」

「でも、ガツカリしてるんでしょ？」

「何にガツカリするって言うんだ？」

アルバスが僅かに寝返りを打って、言わなくても分かるでしょ、と言いたげな目つきでハリーを睨む。

「選択は、ただの手段だ。そこに正しいか間違いかなんてない。選んだ先でどうするか、それが大事だと父さんは思うよ」

ハリリーの言葉に、アルバスは不満そうだった。

「父さんは知ってるからもう間違わないでしょ。僕は父さんほど何かを知ってるわけじゃない。気づかない内にいっぱい間違ってるかも」

「その通りだ。そして父さんだって、お前と同じだよ、アルバス。生きてる限り、必ず苦難は訪れる。そうすると、時に、信じてるものを忘れてしまうことがある。知っていても、それを行動に起こすのは中々できることじゃない」

ハリリーは息を吸った。

「アルバス・セブルス。例えば、誤った道に進んでも、過ちを犯しても、人はいつだって善の道を選ぶことが出来る。勇敢になれる。そう教えてくれる名前だ。ダンブルドアも、スネイプも常に善人だったわけじゃない。二人が善の道を選ぼうと覚悟した後でも、間違いを犯すことはあった。それでも、そうあろうと思うことが大切なんだよ。だから、いつでも思い出せるように、お前にその名前をつけた。アルバス・セブルス、そう唱えればいつでも思い出すことが出来る。決して手放してはいけないことを」

「善って何？ 僕が今からグリフィンボールに移ること？ それともジエームズみたいに色んな人と友達になること？」

アルバスが苛々したように言い捨てる。

「父さんも答えを知っている訳じゃないが、たぶんそれは、自分の人生を誰と比べること

もなく、一緒にいて孤独を感じない人のそばで、幸せに過ごすことなんじゃないかと思ってる」

「自分が幸せに過ごすの？ 相手を幸せにするんじゃないやなくて？」

「もしお前が相手のことを愛しているなら、その人が不幸になるのは嫌だろう？ その人が幸せになっていると、自然と自分も幸せになる」

アルバスは考えるように上を見た。

「分かったような気もするけど……」

ハリーは息子の髪を指先に絡めながら、そつと笑みを作った。

「きつとこれは、そう簡単に理解できることじゃないんだ。父さんだって、まだ理解しきれていないんだから」

アルバスの視線が、初めてハリーの視線と重なった。自分と同じ緑色の瞳が、薄く張られた涙の膜で揺れている。

「僕はダンブルドアやスネイプのようにはなれないよ。父さんみたいにだつて」

「誰かのようになれというわけじゃない。アルバス、お前が見つけるのはお前の道だ。自分なりの方法で探し、自分なりの受け止め方をするんだよ」

アルバスが、息を呑んだ。

「父さんは、僕のことを愛してる？」



喉を抑え込まれたような、詰まった声だった。ハリーはアルバスの頬に手を伸ばす。

「ああ、もちろん」

小さな顔をそつと撫でると、アルバスは視線を流した。

「もう学校には行きたくない」

「ホグワーツにか？」

ハリーは心底驚いた。自分が学生だった頃は、そんなこと全く思わなかったからだ。考えもしなかった。しかし、すぐにアルバスは「自分」ではないと思いつく。

「まあ、お前が行きたくないのならそうしてもいい。家で父さんや母さんが勉強を教えてもいいだろう。そうだ、友達が出来たんだろう。スコールピウスにはそのことはもう話したのか？ 学校に行かないと、言っておいた方がいいんじゃないかな？」

「そんなこと言えないよ」

飛び起きたアルバスはまごついた。

「だって、そんなこと言ったらきつと悲しむ」ここで一度言葉が切られた。「それに、僕だって、そんなお別れみたいなこと言いたくない」

「そうか」

ハリーは微笑む。すると、上体を起こしていたアルバスは膝を抱えて、口元を膝頭にくつつけながら声を出した。

「じゃあ、もう少しだけ……通つてみるよ。イースターまでとか……。帰りたくなったら、帰ってきてもいい？」

「お前がそうしたいのなら」

ハリーはアルバスを抱えられてる膝ごと抱きしめた。

「父さんはお前を愛しているよ、いつだって」

いつだって。

ハリーは何かの気配で目が覚めた。

上半身を起こして、枕元に置いていた眼鏡を掛ける。眼鏡の隣に置いていたアナログ式の腕時計は、まだ真夜中を指していた。

見ていた夢の内容を、はつきり覚えていて。実際にあつた出来事の記憶が主だったが、その前の不思議な場面はまさに夢らしい。結局、あの帽子を被っている少年がハリーなのか、アルバスなのか分からなかった。ハリーは確かに、自分の組み分けに関して深く悩んだ時期があつた。ちょうど今の時期だ。当時は本当にスリザリンが嫌で、組み分け帽子の「君はスリザリンでも上手くやれる」という言葉が「君もヴォルデモートと同じ恐ろしい怪物だ」と言われているように聞こえた。実際、スリザリンは悪でもないし、ヴォルデモートは人間で恐ろしい怪物ではなかった。どうして今さら、あんな夢を見たのだろうか。やはりあれは、アルバスなのかもしれない。きつとそうだ。

掌には、つい今しがた息子を抱きしめたような感触が残っている。もうすぐ子供の世  
界に戻ってから一か月くらいになる。

何の傷跡もない小さな手を見ていると、自分に子供がいたことを忘れそうになって眩  
暈がした。ハリーは自分の手から目を逸らした。

そうだ、目が覚めたのは、何かここにはいけないものの気配を感じたせいだった。  
ハリーは急に気がついた。

開けっ放しのベッドのカーテンの向こうに、薄暗い部屋の様子が見えた。みんなよく  
眠っていて、子どもたちが発てる寝息や鼾が夜の静寂に溶けていく。ぐるりと部屋を見  
渡して、やっとハリーはこの部屋にいるはずのない姿を見つけた。

パーシーと同じ年頃の背の高い少年が、ハリーの机に腰をもたれさせて窓の外を見て  
いる。

彼の端正な顔立ちが、月の灯りに照らされてぼんやりと透けていた。

トム・リドルがこちらを向いた。

少し透けてはいるものの、その視線をしっかりと感じる事が出来る。もう実体化でき  
るようになったのか、と思うと同時に、ハリーは自分の体に何も異変が起きていないこ  
とを確認した。実体化できるほどの力は与えたようだが、ジニーのように魂を持って行  
かれているわけではない。ハリーは安心した。今のところは、全てが予想通りだ。

「トム」

ハリーが呼びかけると、少年は小首を傾げながらそつと近づいてきた。

「僕のことか、分かるの？」

「ああ、君がこうなれることは知っていた」

分かりやすいくらいにリドルの顔に驚きが広がった。

「それじゃあ行こうか」

ハリーはベッドから降りて、スリッパを履いた。洋服ダンスを開いて、透明マントと外出用のマントを引っ張り出す。

「行くなって、どこへ」

「秘密の部屋へ」

この言葉には、リドルはその黒い瞳を僅かに揺らしたただけだった。驚いてはいたのだろうか、その感情は普通の人では気づけないくらい上手く隠されていた。

「君に話したいことがある。でも、その前に場所を替えよう」

外出用マントの上から透明マントを羽織りながら、ハリーは言った。

## 隠されていた怪物

ハリーの宙に浮かんだ首を見つめながら、トム・リドルは静かに後をついて来た。

深夜の Hogwーツの廊下は静まりかえり、窓から射しこむ青白い月の光が廊下を照らしている。しかし廊下の奥に入れば、そこは弱い松明の灯りが闇に溶け込んでいただけだった。

時折火が映りこんで僅かに光る眼鏡から、ハリーはリドルを流し見た。ゴーストのように淡い光に包まれていて、暗闇に浮かんでいるようだ。だがその足は、確かに地面を踏みしめて歩いている。

場所は分かっているから足を止めることはない。リドルも何度も通っていたはずだが、ハリーの一步後ろを控えめに歩いている。きつと確かめる気なのだろう。ハリーが本当にその場所を知っているのかどうか。表情は落ち着いているが、その行動から些細な警戒心が感じられた。

リドルの日記に書きこんだ情報に、ハリーとヴォルデモートの関係はあえて書かなかった。というより、書くタイミングを失ってしまったのだ。

リドルの日記に初めて書き込んだ時点では、まだハリーはどうやってリドルへバジリ

スクに関する交渉を持ちかけるか決めかねていた。

作戦によってはハリーとヴォルデモートの繋がりを知られたら困難になってしまう可能性もあり、無難にやっつけていくには何も話さない方が都合良かった。

彼が知っているのは、ハリーが孤児だということ、マグルに育てられたこと、ダーズリー家での扱い、そして混血であること、他は学校生活のことを軽く話しただけだ。

そしてリドルはハリーが五十年後の世界にいると知ったとき、その時代で何が起きているかについても知りたがった。特に闇の魔法使いについて。

だからそのときはヴォルデモートのことを少し話した。

今は力が弱まっていて身を潜めている、というリドルはヴォルデモートを弱めた者に興味を持った。ハリーはマグル育ちだからあまりよく知らないのだと誤魔化した。

多少機嫌をとるために、大人たちはヴォルデモートのことを恐れてあまり話しながらないとも付け足しておいた。たぶんリドルはその答えである程度は納得したはずだ。それ以降は、ヴォルデモートに関して特に聞いてくることもなかった。

もちろん、ヴォルデモートが強力な開心術士であり、その分霊箱も開心術が使えることは知っている。記憶のリドルにはまだ魔力がほとんどないものの、ヴォルデモートが分霊箱を外部の攻撃から守る術の一つとして分霊箱にそういう魔法をかけているのだ。

だからハリーは、日記に触れている間は開心術を行っていた。

昔は苦手だったが、闇祓いをする上で身に付けないわけにはいかなかった。それに最終的にハリーは、ヴォルデモートを閉めだすことにも成功している。ドビーを埋葬した時、流れ込んでくるヴォルデモートの感情を閉めだしたのだ。

情報はリドルと接する上で、ハリーを貫く刃にもなれば、盾にもなる。簡単に明かすわけにはいかない。

グリフィンドール塔を出て十五分ほど歩けば、四階の図書館へ繋がる廊下に辿り着く。窓がなく松明だけの薄暗い中を進み、ロックハートの部屋を過ぎて、そのすぐ横にある幅の狭い階段を降りた。

U字の階段を下ると、突然、静寂の中に大きな笑い声が響いた。鼓膜に突き刺さるような、甲高い声だ。

暗い石造りの廊下に、笑い声の他に何か軽いものがぶつかり合う音が反響する。だんだん近づいてくる。

ハリーは透明マントを頭まで被った。リドルの姿も消える。

廊下の向こうに灯る松明が煽られて揺れていた。

「うーん？ 誰かいるのかあい」

オレンジの薄明かりに、宙に浮かんだ小男の姿が浮かび上がった。小男は口が裂けそうなほど大きな笑みを浮かべ、窪んだ大きな目を忙しなく左右に動かしている。ポル

ターガイストのピーブズだ。

「出来そこないのフィルチかな？ イタズラな生徒かな？ どこに隠れてるんだあい。出ておいでえ」

ピーブズは囁くような甲高い笑い声を上げる。ハリーは透明マントがずり落ちないよう、持つ手に力を込めてゆっくり前に進んだ。

ピーブズは手に持っていた紫の光沢がある封筒を壁にぶつけながら、ハリーの上を素通りする。仄暗い明かりに照らされて、封筒に銀のインクで「クイックスペル」と書かれた文字が光った。ピーブズは気味の悪い笑い声を出しながら、廊下の向こうへ消えて行った。

静寂が戻った廊下で、ハリーは透明マントから顔だけを出す。

「トム」

呼びかけると、再びリドルが姿を現した。それを確認すると、ハリーはまた足を進めた。

目当ての真鍮の扉は直ぐそこにあつた。

そこは三階の女子トイレだ。ハリーは一切の迷いなく扉を開け中に入った。普段は嘆きのマートルが住みついている故障中のトイレだが、今は別の水道管へ行ったのか、マートルの気配はなかった。好都合だ。



手洗い場の傍に立って透明マントを脱いだハリーを、リドルは相変わらず観察するようで見ている。さあ、ここからどうするんだ、というような挑戦的な目をハリーに向けていた。

「開け」

ハリーが蛇語を話して入り口を開ける間、リドルには僅かな表情の変化もなかった。

透明マントを外出用マントのポケットに突っ込んで、現れた地下へ繋がる太いパイプを滑り降りる。

二つ目の扉を抜け、地下通路で最も広い空間に出たところで、やっとリドルが口を開いた。

「よくここにが分かったね。それも君の年齢で」

リドルは身体の前面をハリーに向けたままゆっくりと前に回る。その背後には、細長く奥へと伸びる部屋が続いていた。両端には、部屋の入り口と同じように蛇が絡み合う彫刻の施された石の柱が一對ずつ等間隔で並んでいる。柱に付けられた松明の緑の炎が、部屋を薄暗く照らしていた。その灯りは天井までは届かず、闇に包まれた上空は果てしないように見える。

ハリーが足を進めると同時に、リドルも後ろ向きでゆっくり歩きながらハリーを見つめていた。その身体が、柱の巨大な黒い影に包み込まれていく。

「僕は五年かかった。五年生でやっと、図書館にある水道管工事の記録に知っている名前を見つけたんだ。入り口が隠されている場所はトイレが設置される予定地だった。入り口を知っていた僕の先祖が、一族の秘密が明るみにならないよう改装を買ってやった。彼女の名前が残されていたことで、ここが僕にも関係があるかもしれない場所だっけ気がついた。君はどうやって知った？」

「君は、ヴォルデモートなんだろう？」

ハリーは直ぐには答えず話題を変えた。影の中で、リドルの目に赤い稲妻のような光が走った。

「へえ、名前のアナグラムに気づいたのか？」

「君から教えてもらったんだ」

ハリーは全神経を集中させて、リドルの目を真っ直ぐ射抜いた。

「僕たちは、親子だ」

ハリーは心を落ち着かせつつ、敢えて一年生の時のヴォルデモートの記憶を思い出しながら話した。クイレルの頭に取り憑く彼が言う。「命を粗末にするな。俺様の側につけ……」

そのシーンを繰り返し考える。こうすることで、開心術をされてもハリーが開心術を行って何かを隠していることは気づかれない。相手に見えているのは、ヴォルデモート

がハリーを誘い込んでいる様子のみだ。

リドルはハリーの瞳を抉るように見つめながら、浅く呼吸をしていた。

「蛇語を話せるのも、秘密の部屋の場所を知っているのも、僕たちに繋がりがあるからだと  
思わない？」

リドルの呼吸が大きくなっていくのが分かる。ハリーも小さく息を吸い込んで、言葉を続けた。

「本当は、僕は去年、ヴォルデモートと会っている。そのとき親子だつて知つたんだ。そして言われた。スリザリンの継承者として秘密の部屋を開けると。十六歳のときの記憶を保存した日記帳の存在も教えてもらった。書きこんでいれば、そのうち実体化して秘密の部屋のことを教えてくれるともね」

リドルが疑うような目をハリーに向けた。

「そんなことこれまで一度も……」

「言わなかった。でもそれには理由があるんだ。僕は日記のありかは知っていたけど、それを預かっていた人と接触を起す前に事が起こってしまった。君の思惑とは裏腹に、君の昔の部下が勝手に日記帳を使おうとした。ヴォルデモートが力を失ったことで彼の忠誠心は薄れていて、かつて主人から預かった日記を個人的な理由で僕の知り合いの持ち物に潜ませた。僕は君のことを聞いていたし、彼に渡されていたことも知ってい

たからもしやと思ったんだ。けれど確証はなかった。その部下は闇の魔術の道具をいくらか集めているので有名だったし、実際君をみたことはなかったから、君がその部下の個人的な魔法道具なのかヴォルデモートの言っていた日記帳なのか判断がつかなかった。トム・リドルという名も、教えられていなかったから、僕は推測するしかなかったんだ。ヴォルデモートの日記帳の存在は誰にも明かしてはいけなく強く言われていたから、僕から君に尋ねる訳にもいかない。だからヴォルデモートのことを聞かれても繋がりが悟られないようはぐらかしていた。それで暫く様子を見て、君が本当にヴォルデモートの日記なのか見極めようとしていた」

ここでまた一つ息を吸い込んで、ハリーは微笑んだ。

「そして今日、君は姿を現した。僕はやっと確信できた。ねえ、バジリスクの操り方を教えてくれるよね？」

今回の作戦ではハリーとヴォルデモートが関わったこと自体は隠す必要がなかった。その分、この一ヶ月それを黙っていたことをフォローしなればならない。そのためハリーの口から流れるように出ていく作り話を、リドルは無表情で聞いていた。漆黒の目は、何も映していない。思考の底へ潜った様な眼差しだ。再び話し出したリドルの声は、眩くようだった。

「君と僕は共通点が多い。そう……混血で孤児で、マグルに育てられた。汚らわしく愚

かで弱者なマグルから、相応しくない扱いを受けてきた。さらに君は蛇語を話せる。偉大なるサラザール・スリザリン以来、このホグワーツに入学したパーセルマウスはある一族のみだ……」

ここでリドルが瞳を動かし、興味深そうにハリーの頭からつま先までを見下ろした。「それに見た目もどこか似ている」

ハリーはリドルの警戒心が高まったのを感じた。

「僕たちが親子だというのなら、君は僕にとって最も危険な存在じゃないのか？」

冷やかな目線に、ハリーの頬が微かに震える。

「君は親しい繋がりを危険だと捉えるのか？」

リドルが鼻で笑った。

「親しい繋がりなど必要ない。ああ、そうとも。僕のような力を持つ者はこの世に一人で十分だ。そうだな、ハリー。まずは君を試そうか。見せてやろう、サラザール・スリザリンがどのような力を残したのかを。さて、スリザリンの怪物相手にどこまで戦えるかな？」

リドルがハリーから少し離れて、一對の高い柱の間で立ち止まった。蛇の絡みあう彫刻が施された柱の間に、巨大な石像が立っている。魔法使いの全身像で、床を踏みしめる足は、寮の部屋ほどの大きさだった。リドルは上に顔を向けて、薄く口を開ける。

彼が見ている方向には、闇で上半分が覆われたスリザリンの顔があった。

「スリザリンよ、ホグワーツ四強の中で最強の者よ。我に語りかけよ」

リドルの蛇語に応えるように、スリザリンの下唇が下がっていく。現れた穴は徐々に大きくなっていった。

来たか。ハリーは杖を握る手に力を込めた。

親子だと告げることには、ハリーは二つの可能性を予想していた。

血の繋がりがあるといふ言葉がもし良い方に働けば、今回のことは穏便に済ませられるかもしれないと思っていた。ハリーをヴォルデモート自身が放った僕としてみなし、クイレルを使っていた本体のように、力のない自分の代わりにハリーを駒として使おうとするかもしれないと。

しかし反対に、邪魔者として始末される未来が待っている可能性もハリーは気づいていた。そしてリドルは後者を選んだ。

当初は、なぜヴォルデモートが赤ん坊のハリーに手を出せなかったのか、についての真相を取引材料にして交渉しようとしていた。それは彼が一番知りたい情報のはずだし、いい交渉の材料になるかと思われたが、こちらがあまりにも有利過ぎると今度はリドルが慎重になってしまう。時間をかければかけるほど、リドルの力は強くなる。

ハリーの中にもまたヴォルデモートの魂がある影響なのか、ジニーのときよりもリド

ルが力をつけていくスピードが速い気がした。一日、二日と延ばし続けていって、どれほど彼が力をつけるか判らない。

今のリドルにはまだ実体化できる程度の魔力しかなく、かつて秘密の部屋であったときよりも透けている。もし今ハリーに危機感を抱いて殺そうとするならば、必ずバジリスクを使ってくるはずだ。

実際に、こうしてバジリスクは呼び出されている。

とうとう穴が開ききった。ハリーは目を閉じる。

考えてきたいくつかの作戦を頭の中でなぞり直した。

最初の作戦では、バジリスクを確実に仕留められるか判らないが、もし上手くいけば一番リスクの少ない方法で終わらせることができる。

大人になってから、バジリスクのことを調べる機会があった。

日刊預言者と繋がりのある出版社から、ハリーの学生時代を本にしたいという依頼があったのだ。本など出す気はなかったが、勝手にあることないことを書かれるのも嫌だった。

世間では既に、非公認でハリーについて書かれた本が多数出回っていたが、その内容はただの噂をかき集めた失笑もできないほどの酷いものだった。

出版社は例えハリーが断ったとしても、あれこれと理屈をつけて本を出すに違いな

い。あの戦争に関わった、特にハリーに関しての本は金のなる木なのだから。

だからハリーは依頼を受ける代わりに、執筆する人を自分で選ぶという条件を提示した。信用できて、中立の立場で書いてくれそうな人に頼んだ。スーザン・ボーンズは、彼女の叔母のアメリア・ボーンズ同様、魔法法執行部で働いており、公正な魔女でまさに適任だった。

ハリーが「戻ってくる」前にはもう、ヴォルデモートを倒すまでの七年間全てが出版されている。

第二巻、「ハリー・ポッターと秘密の部屋の謎解明」にバジリスクの章が書かれた日。スーザンはいつものようにハリーの家を訪ねてきていた。

外では目立つので、ハリーは彼女を家に招いたのだ。彼女なら生活圏に入ってきて来ても心配ない。スーザンが執筆のための取材や確認をするために訪ねてくる日は、ロンとハーマイオニーもハリーの家にやって来た。

リビングで、ハリーはソファに座ってその膝にリリーが座り、ジニーが隣に座る。アルバスは四巻が執筆される辺りから、この作業が始まると部屋に閉じこもるようになっていたが、このときはまだジニーの隣に本を持って座っていた。ソファのすぐ傍にあるダイニングのテーブルでは、タイピングをするスーザンの周りをジェームズが落ち着きなく動き回っては茶々を入れていた。



ハーマイオニーはスーザンの前に座って彼女の書記を手伝い、ロンは庭に繋がるテラスのデッキチェアに寝そべり、自分が活躍するときだけリビングに顔を出していた。

スーザンがメモされた内容を読み上げながらタイピングしていく。

バジリスクは、マグルの間では空想の生き物とされている。ギリシア出身の闇の魔法使い「腐ったハーポ」が品種改良を重ね生み出した毒蛇の王である。怪物の中でも、最も珍しく、最も破壊的な生き物だ。

「ごうごう」

ジエームズが拳を振った。

鶏の卵から生まれ、ヒキガエルの腹の下で孵化され、ときには何百年も生きながらえることがある。

毒牙の殺傷とは別に、目からの光線で生き物を死に至らしめる。なお、一度反射させた光線や対象がゴーストだった場合は、死ぬことはないが石化する。石化を解くには、マンドレイク葉が有効である。

蜘蛛にとってバジリスクは天敵で、大量の蜘蛛が逃げ出す場合その近くにバジリスクが存在していると考えてもいい。

「ロン伯父さんにとっては蜘蛛が天敵だけどね」

リリーがハリーを見上げて小さく笑った。ハリーも微笑み返す。軒をかいていた口

ンが「へあ？」と気の抜けた返事をした。

バジリスクにとつての天敵は、雄鶏が時をつくる声で、それからは唯一逃げ出す。

腐ったハーポがパーセルマウスだったので、蛇の怪物が作り出されたのではないかと  
言われている。実際、普通の蛇と同じようにバジリスクもパーセルマウスのみと意思疎  
通をし、パーセルマウスのみがその力を制御できる。

「父さんもパーセルマウスでしょ？」

「今は違うよ」

ハリーはジェームズに答えた。

元々備わっている目の光線に関して、本来なら敵や食料と見なしたものの全てに対して  
使われるものだろうが、パーセルマウスの指示によつては対象を制限することも出来  
る。それらを利用して、生物兵器としても使える。

ホグワーツの地下深くに生息していたバジリスクは、千年以上前にサラザール・スリ  
ザリンが「ホグワーツ校からマグル生まれを追放する為」に卵から孵したとされる。  
腐ったハーポがどのような意図でバジリスクを生み出したのかは不明だが、スリザリン  
の場合はパーセルタングにより特定の思考をバジリスクに植え付けていたと思われる。  
このように、バジリスクは主人に忠実な傾向がみられる。

飲まず食わずでも長く生きていられることから、冬眠に近いことが出来ると推測され

る。

また、一部の蛇に備わるピット器官（哺乳類を餌とする夜行性の蛇がもつ温度感知機能）は、視覚や嗅覚に優れたバジリスクは持つていないものと思われる。

その皮膚は硬く、ドラゴン程とは言えないもののその鱗を貫くには相当の力（あるいは魔力）が必要である。

「いいぞ、いいぞ」

「ジエームズ、静かにしていなさい」

ジニーが諫めた。

石化した被害者の周辺のみには焼け焦げた跡があること（ハリー・ポッター、ハーマイオニー・グレンジャー、ロン・ウィーズリーが確認）、バジリスクは目から光線を出すという「幻の生物とその生息地（ニュートン・スキヤマンダー著）」の記述から、バジリスク自身の意志で光線を出すかどうか決められると推測される。

その場合、単純に目を見ただけでは死に至らず、バジリスクに殺意がないと光線はない。さらに光線に目を捕らわれない限り被害はないものとされる。光線は光の反射を利用して攻撃性を得ると考えられ、その場合、光源のない場所ならバジリスクの目は無力であると推測できる。

このことから、バジリスクに認められた者は目を開けたまま対峙することが可能であ

と思われる。また同じパーセルマウスにも相性があるらしく、可能性としては「自分を生み出した者は絶対的に主人とし、それ以外の者（パーセルマウス）に関して はバジリスクが選んでいる」ことがあげられる。選考基準は不明であるが、 Hogwartz のバジリスクの場合、サラザール・スリザリンの血筋の濃さで選んでいた可能性がある。「ねえ、早く！ 早くバジリスクを剣でやつつけるとこ書いて！」

ジエームズがテーブルに両腕を突っぱねて乗り上がるように跳ねた。

「ジエームズ、邪魔をしちゃいけないよ」ハリーが注意した。

「ママもこの事件には関わっていたんでしょ？」

ハリーの膝に座るリリーが無邪気な顔で母親を見上げた。ジニーは苦笑いをする。

「最悪な思い出の一つね」

「どうして雄鶏の声で逃げるの？」

今まで静かだったアルバスが突然声を出した。

「雄鶏の声には何か魔力があるのかな？」

「マグルの神話でも、暗黒の生き物は雄鶏の声で逃げ出すという説を様々な国でよく見るわ」

ハーマイオニーが答える。

「はーやーく、ゴドリックの剣を出すところ！」

「じゃあ雄鶏が鳴くと何か怖い事でも起こるのかな。闇の生き物が怖がるような何かや」

ジエームズに負けないよう、アルバスは声を張り上げた。

「そうだな、雄鶏が鳴けば……朝が来る」ハリーが呟く。

「太陽が昇るんだ」

ハリーがダイニングの方を見ると、ハーマイオニーと目が合った。

「陽の光が弱点なんだ」

「でも私が襲われたときは晴れた日の昼間よ」

「図書館の前で、だろう？ 図書館近くの廊下は窓がない」

「それにあそこは三階のトイレから近いわ。陽に当たる心配は全くない」

ジニーが付け加えた。

「それも追加して書くべき？」

スーザンが尋ねた。

「いや……あくまで推測だ。確認したわけじゃない」

「リドルは知らなかったのかしら。だって雄鶏を殺してたわけだし」

ジニーは首を傾げる。

「あるいは知っててわざと教科書通りの行動をしたかもしれない。万が一の時、弱点を

悟られないように。どちらにせよ、今はもう確認する術はないがね」

ハリーは既に話題に空き始めているリリーの頭をゆっくり撫でた。

目を閉じていたハリーは、巨大なものが落ち石の床が振動するのを感じた。

もしも今考えている方法で上手くいかなければ、昔のように立ち向かうのみだ。ハリーは杖を握る手に力を込める。

「あいつを殺せ」

リドルが蛇語で命令する声が聞こえた。床をはいずる音と、熱く生臭い息が鼻先に迫ってくる。

ハリーは逃げなかった。杖を天井に向ける。

「ルーマス・ソレム！（太陽よ）」

ハリーの杖先から、眩い光が宙に飛んだ。

網膜を透かすほどの明るさと、暖かな熱が上から降り注ぐ。バジリスクの悲痛な声が部屋中に響いた。

とうとうハリーは目を開けた。さきほどまで薄暗かった部屋は、よく晴れた日の昼間のように明るい。闇に包まれていた天井も、今は明らかに、ドーム状の作りを晒している。

ハリーの目の前に、バジリスクがいた。悶え、声を上げて苦しんでいる。

バジリスクののた打ち回る頭から、二筋の黒煙が上がっていた。

その顔が、ハリーに向けられた。しかし、その目から死の光線が放たれることはなかった。目が焼き潰れていたのだ。

バジリスクは酔ったように頭を数回振らつかせると、やがて地面に勢いよく突っ伏した。床が大きく揺れる。

「僕のバジリスク……！」

リドルが苦々しく言った。

ハリーが杖を下ろすと、打ち上げられていた日光は溶けるように消えた。先ほどより濃く感じる闇が訪れる。

ハリーは杖先に光を灯して、警戒しながらバジリスクに近寄った。

その鼻先からは、まだ温かな息が漏れていた。

「弱って気絶したんだ。死んではいけない」

そう言いながらちらりとリドルを伺うと、彼は黙り込んで蛇の頭を撫でていた。焼きただれた眼の上を、すらりとした指の長い手が柔らかく動いている。

ハリーはその姿を見て、何となく外出用マントのポケットに突っ込んだ日記帳に触れた。そうしたの間違いだったとすぐに後悔した。指先に、日記帳から発せられる心臓の鼓動のようなものが伝わってくる。

感じてしまえば、ハリリーの胸に迷いが生じた。

バジリスクの牙を手に入れ次第、分霊箱は破壊していくつもりだった。もちろん日記帳も例外ではない。バジリスクのことを片付けば、すぐに壊す予定だったのだ。

一年以上先のヴォルデモート復活までに、ハリリー以外の分霊箱を全て破壊できていれば、相手が手強くてもこちらが圧倒的に有利な状況から戦いを始められる。

そうすれば、昔より失われるものも少なくて済むかもしれない。大事な者たちを失わずに済むかもしれない。

そう考えていた。

けれど、ハリリーはここで日記帳を破壊することに躊躇を感じていた。しかもこんな時に限って、このリドルがアルバス・セブルスと同じ年頃だと気付いてしまう。

そして気づいてしまつてからふと頭に蘇るのは、かつてダンブルドアの記憶を通して見た、自分の親について必死に情報を集めようとしていた幼いトム・リドルだ。

前はバジリスクの牙で日記帳を貫くことが出来た。しかし、あのときよりも色々を知ってしまった自分に、同じ行動がとれるだろうか。しかし、あのときよりも色々

ハリリーの足元には、地面に頭を打ち付けたときに折れたであろうバジリスクの牙が三本ほど転がっている。

その根元を持ちあげて、ハリリーは思った。



やるなら今だ。ポケットから日記帳を取り出して、刺せばいい。

リドルはハリーが分霊箱の破壊方法を知っているとは思わないだろう。もし知っていれば、まずは何が何でも日記帳を自分の手元へ収めようとするはずだ。

ハリーが日記の特別な秘密を知っていると気付かれてしまう前に、済ませてしまう方がいい。

それでもハリーは考えずにはいられない。もしも彼を壊さずにおいたら、どんな可能性がそこにあるのだろうか。

もちろん、それは危険な考えだ。ハリーの手元に残り、力を得たリドルがどんなことをするか、考えるまでもなく明らかである。

けれど、彼を生かすという選択肢が思い付ける時点でハリーの心は既に決まっているも同然だった。

愚かな考えだったと後悔する日がくるかもしれない。それでも、ハリーはその考えを捨てることは出来なかった。ヴォルデモートが「ハリーの弱点だ」と嘲笑し、ルーピンからも戒められたことのあるその部分が、ハリーに日記を壊さない選択肢を示している。

ジニーのときとは違って、ハリーの魂は完全に奪い取ることが出来ないからハリーに依存している限り、リドルは完全体にはなれない。誰にも触らせず、ずっと見張れば、リ

ドルの力を好き勝手に使うことが出来ないよう抑えられるかもしれない。

ハリーは持ち上げていたバジリスクの牙をそつと地面に置いた。

それでいいのか、と叫ぶ心が全く残っていないわけではない。だがハリーは鼓動が伝わる指先を日記帳から離して、小さく息を吸い、思考の世界から浮き上がった。

そのとき、突然ハリーは足先から何か気味の悪い感覚が這い上がってくるのを感じた。

闇祓いとしての勘が何かがおかしいことを伝えているのだ。

心臓の鼓動が早くなる。神経が研ぎ澄まされる。周囲の音や、臭いや、温度に敏感になる。

何がおかしい？

俯いていた顔を上げた。目がスニッチを捕えるときのように、広い範囲を素早く捉え、再び目の前に視線が戻る。ちょうどバジリスクの鼻先があった。そこからは、風を感じない。

ハリーは思わず立ち上がった。死んでしまったのだろうか。

偽の太陽光でも、バジリスクを死に至らしめるほどの効果を發揮してしまうのだろうか。

すると視界の端で何かが動いた。そちらを向くと、リドルと目が合った。

彼は笑顔だった。

「トム？」

仮面のように温度を感じない笑みは、この場に相応しくないもので気味が悪い。怪訝な顔をしていると、リドルは笑みを浮かべたまま見せつけるようにして懐に手をいれる。そのときハリーは、リドルの輪郭がはつきりしていることに気づいた。ほぼ生身の姿だ。

「どうして……」

「ハリー、君は予想していた以上に上手くやった。だが、僕が何の準備もなく行動すると思っていたか？」

リドルは口角を上げたまま口を閉じた。舐めるような目がハリーを見ている。そして再び、口が開かれた。

「お前はここで始末しておくべきだろう、確実に」

今やその顔は笑みを浮かべていない。

懐に入れられていた手が抜かれ杖が取り出される。ハリーは目を見開いた。瞬時に自身の杖を持ち上げたがリドルの方が早い。視界が歪み、冷たい石壁の世界が消えた。